

文化庁・平成 22 年度文化芸術創造都市推進事業

創造都市政策セミナー 要約集

実施： 平成 22 年 9 月 23 日(木・祝)13:00～9 月 24 日(金)12:00

会場： ヨコハマ創造都市センター1F(23 日)、北仲スクール3F(24 日)

参加： 自治体、文化芸術(団体)、研究者、学生等 約 100 名

主催： 文化庁／NPO 法人都市文化創造機構

共催： 横浜市APEC・創造都市事業本部／ヨコハマ創造都市センター
(YCC)[公益財団法人横浜市芸術文化振興財団]

協力： 大阪市立大学都市研究プラザ／北仲スクール[横浜文化創造都市ス
クール]



平成 23 年 3 月
NPO 法人都市文化創造機構

目次

一日目 レクチャー

あいさつ	6
近藤 誠一 文化庁長官あいさつ.....	6
林 文子 横浜市長あいさつ.....	7
 レクチャー1 「今後の文化政策とアジア芸術創造都市」	9
1. 地方都市の画一化と危機.....	9
2. 商店街はセーフティーネット.....	10
3. 市場原理の荒々しさとやせ細るコミュニケーション	10
4. 地方都市の文化資本が人材を育てる	10
5. 多様な体験と学びへのモチベーションの持続が大事	11
6. 新しい出会いの広場、「原っぱ」をつくる.....	11
7. 多様な文化のメニューで「緩やかなネットワーク社会」をつくる	12
8. 市民参加の「同心円型」の集客.....	12
9. 金沢の取組み：21世紀美術館.....	13
10. 富良野の取組み：ラベンダー畑と体験型観光.....	13
11. 文化の自己決定能力。まず自分たちで楽しみ誇りをもつこと.....	14
12. まとめ：地域社会の文化資本の復興から地域の復興へ.....	15
＜質疑＞	15
 レクチャー2 「文化資本の経営と創造都市」	17
1. 文化資本と企業経営	17
2. 文化資本の形成.....	18
3. 豊かさの大逆転.....	18
4. フランスとアメリカにおける文化の経済化.....	19
5. 日本文化の発展契機と戦後のアメリカ化.....	21
6. 矛盾をバネにする創造都市	21
7. 自らが楽しむところに創造都市	22
＜質疑＞	23
 レクチャー3 「アートから創造都市を構想する」	26
1. 創造都市の変化のトレンド	26
2. イギリス・ニューカッスル	27
3. オランダ・アムステルダム	28

4. ドイツ・ルール地方	29
5. スペイン・ビルバオとフランス・ナント	30
6. アイルランド・ダブリン	31
7. アジア・釜山とシンガポール.....	31
8. 国内各地	32
9. 狭義の文化政策から広義の文化政策へ	33
<質疑>	34
 レクチャー4 「連携による創造都市の発展」	36
はじめに.....	36
「創造都市時代」の到来	36
「創造性革命」・システム転換と創造都市	36
1. 「創造都市」とは何か？ なぜ、時代のキー概念となったか？	37
3層の文化資本と創造都市	37
都市間競争から、創造都市の連携へ.....	37
2. 創造都市の多様な発展.....	38
創造都市のボローニャモデル	38
バルセロナと世界文化フォーラム.....	39
C.ランドリーとクリエイティブ・ロンドン	39
ストリートワイズ・オペラと「アートによる社会包摂」	40
R.フロリダとクリエイティブクラス.....	40
3. 連携による創造都市の発展に向けて.....	41
ユネスコの創造都市ネットワークと創造経済レポート2008（UNCTAD）	41
モントリオールとサンタフェの試み.....	41
文化庁による文化芸術創造都市表彰と日本の創造都市.....	42
おわりに.....	42
<質疑>	43
 二日目 ワークショップ	
事例報告1・神奈川県横浜市	45
三種類のまちが隣接した都心.....	45
都市デザインから創造都市へ.....	45
形成される創造界隈拠点	46
具体的な取組事例	47
ランデヴー・プロジェクト.....	47
トリエンナーレ&オープン横浜	48

京阪神のベッドタウン化するまち.....	50
ひとづくり・芸術文化の拠点として「さきら」スタート	50
さきらジュニア・オーケストラ・アカデミー	51
ボーダーレスアート.....	51
コミュニティアート.....	52
今年はじめた文化庁・文化芸術創造都市モデル事業.....	52
子どもがサンドイッチマンを	53
舞踏とお化け屋敷の融合	53
つながりを求める地域の人々	54
 コメント	 55
＜質疑＞	57

この「要約集」は、セミナーで話された内容の要旨を
まとめたものであり、議事録的なものではありません。
文責は編集者にあります。

一日目（9月23日）

開会あいさつ・レクチャー

13：00～18：30

横浜創造都市センター（YCC）1F

あいさつ

近藤 誠一 文化庁長官あいさつ

只今ご紹介にあずかりました、近藤です。この雨の中をたくさんおいでいただきまして、主催者として本当に心から歓迎いたします。

私は7月末に文化庁長官を拝命いたしました。それまで38年間外務省に籍を置き、半分の19年を外国で（ヨーロッパが一番多いですが）、後の19年を日本で過ごしてまいりました。その間に強く感じたことは、最近の日本は元気がないということです。なぜかと色々考えたのですが、17世紀の科学技術や経済学の発達以降、非常に物質的な価値を重んじる流れが人類にはあったと思います。日本の富国強兵もそうでありましたし、戦後の復興もやはり経済に重点を置いてきました。それはそれで非常に成功しましたが、実は安全も繁栄も心豊かな生活を送るための条件にすぎないのに、いつの間にかそれが目的化して、肝心の目標を見失ってしまったのではないかと。目標というのはお互いに敬い、心の豊かな生活することです。それが本来の目的であり、人生で一番重要なことです。その目標に経済が代替して、日本人は内向きになっている、そんな感じがしておりました。そのような中で日本の文化行政を担当するポストに就きまして、ある意味でうれしいと同時に非常な重責であると感じております。

今日は大変素晴らしいスピーカーが4人そろっておりますので、あまり私が時間を取ってはいけませんが、私はこれから日本を美しくつくっていくために、重要なのは人であり、人をつくるのは文化であると確信しております。文化芸術によって人はコミュニケーション能力を付け、ネットワークをつくり、そしてお互いに刺激し合って、創造性＝クリエイティビティを養っていく。それが心を養う原点であると思います。お金も大事ですし、安全であることも大事ですが、日本ほど安全で豊かな国は世界にほとんどありません。そういう恵まれた状況だからこそ、人生本来の目的を思い出すべきでしょう。

ではどうやって文化芸術を活かすのかというと、場が必要です。これは箱物という意味ではなく、都市がその1つの例です。都市に集まる人たちが文化芸術を通じて繋がり、刺激しあう。それによって、先ほど申し上げたような心の豊かさが育っていきます。今度は国内の都市同士が結び付く、そして国境を越えて世界の都市が結び付きあう。そういうことで、このグローバル化の中で我々一人ひとりが自信に満ちた、自分の国の文化に誇りを持つ生活が送れると思います。

それを行っていく上で中央政府、文化庁がやることはたくさんあると思いますが、同時にやはり中央の政府に頼る時代ではありません。地方が、横浜のような大きな都市のみならず、小さい都市でも村でも、それぞれの地域の特性を生かして、コミュニティをもう一度作り直す。そういうことでクリエイティビティを養い、コミュニケーション能力を養っていくことが一番必要だと思います。

教育もちろん必要なのですが、同時にやや忘れられがちなのがこの文化芸術、創造産

業の分野だと思います。これこそ家庭で、あるいは村で、まちで、国で...、1日・24時間、1週・7日間、1年・365日間...、人のつながりを通して心を豊かにしていくもっとも有効な分野です。その重要性をもう一度思い起こすという意味で、文化庁としても創造都市の事業を進めております。

手元に過去の鍵となる都市をリストにしてきましたが、だいたい1970、80年くらいからいくつかの都市で文化芸術を使った都市の再生が取り組まれています。ナント市やグラスゴーから始まり、それがリチャード・フロリダとかジョン・ホーキンスとか、チャールズ・ランドリーとか、そういう英米の学者によって理論化され、そして国際的なネットワークがヨーロッパにできました。アラブにもあるんですね、アメリカにもあります。じゃあ、なぜアジアにないのか、それを是非作りたいと当時思ったものです。

しかし横浜市では、先ほどお聞きしたところによりますと、すでに71年くらいから都市を創造性の場にしようとする動きが始ったようですね。創造都市政策セミナーにもこれだけの方が集まっていただきました。そうそうたるメンバーのパネリストと、それから聴衆の方々も素晴らしい方が多いようにお見受けしております。是非、これを良い機会にして、強いメッセージを出していただきたいと思います。

なにより大事なものは継続です。たまたま今年愛知でトリエンナーレが始まりましたが、トリエンナーレと言った以上3年に1度は必ず行う。そのために、次の3年目の準備をする。そのように継続していくことが、先ほど申し上げたような、新しい日本づくりの視座になると思います。そうした期待を込めて、今日は休み返上で参加してまいりました。終わりまで、懇談会まで残って勉強しますので、最後までよろしくお願いします。それでは実り多きセミナーになることを心から念じて、ご挨拶とさせていただきます。

林 文子 横浜市長あいさつ

横浜市長の林文子でございます。ただいま、近藤長官からごあいさつをいただきまして、本当に感銘いたしました。こういうことを申し上げては失礼かと思いますが、文化芸術に対する造詣の深さ、見識の高さを感じられまして、こういう方が文化庁長官になられたということは今日お集まりになられた皆さま、私どもにとって素晴らしいことだと思います。ここで私は挨拶しなくていいのではないだろうかというくらい感激いたしました。

文化芸術創造都市というのは世界的に見ても評価の高い政策であります。なかでも文化芸術や創造性を生かした産業振興や地域活性化の実現は閉塞感のある現代の日本にとって大きな成長戦略につながるものだと思っております。本日この会場にはさまざまな都市から、自治体、市民団体、NPO法人、研究者などの皆様がお集まりになっております。是非、本日を契機に私どものネットワークを強化して、それぞれが個性豊かな文化芸術を発信することで、日本全体が素晴らしい文化豊かな国として世界に発信できるそのようにしていきたいと思っております。

横浜市は平成 16 年から 7 年、創造都市の取り組みに力を入れてまいりました。特にバンカートや黄金町地区での活動が内外からご評価をいただきまして、国内だけではなく、韓国や台湾など様々な都市から視察団がおこしになり、その後各地で創造都市の活動を活性化させているとうかがっています。こうした取り組みをご評価いただき、平成 19 年度には日本で最初に文化芸術創造都市部門の文化庁長官表彰をいただきました。

また、本日これからお話をされる資生堂の福原名誉会長様には創造都市横浜推進協議会の会長をお願いしておりまして、今年の 1 月には「クリエイティブシティ横浜の新たな展開に向けて」ということで、ご提言をいただきました。提言には「全ての横浜市民はアーティストである」という一節がございました。市民一人一人が創造性を発揮することは都市の抱える様々な問題を解決し、都市全体の魅力アップにつながるという趣旨でございました。本当に素敵な言葉を頂戴したと思っております。

創造都市の大きな取り組みとして継続している横浜トリエンナーレについてちょっとお話しします。来年 8 月から約 3 ヶ月間行うことを決めています。トリエンナーレのディレクターには横浜美術館館長の逢坂館長をお迎えいたしまして、横浜美術館などの主会場と、まちが一体となって、アートがあふれるまちを目指してまいります。皆さまのご支援をいただきながら、国際展として他にはない特色のあるトリエンナーレにしていきたいと考えています。よろしくお願い申し上げます。

さらに横浜らしい創造都市の取り組みとして、まちと連動した企画の強化、発信の準備を行っております。皆さまのお手元にご案内があると思いますが、現在 **Invitation to Open Yokohama** という事業を進めております。これは横浜の秋を彩る 200 以上のイベントを 1 つのキャンペーンにまとめて、横浜の魅力をたっぷりご紹介するものです。来年度は横浜トリエンナーレに合わせて、さらに事業を拡大して実施いたしまして、多くのお客様に横浜で文化芸術を体感していただこうと考えています。

この事業ではまず横浜市民の皆さんに、横浜は楽しい、大好きだという思いを強めていただきたい、そういう気持ちで取り組んでおります。そしてそれを内外からのお客様にも広めたいというものでございます。市民の方々も来街者の方々も横浜を訪れる全ての方々に横浜ファンになっていただく、横浜の魅力を満喫する、そんな創造都市横浜を目指していきます。皆さまにも是非とも横浜をお楽しみいただきたいと思えます。

本日はこの後創造都市の魅力について、本当に長官もおっしゃっていましたが、これだけ素晴らしい方が揃うという、なかなか機会の少ないレクチャーが予定されています。ご出席の皆様がこのセミナーを機会に新たにまた情熱を燃やし、ここで得た知恵を持ち帰りいただいて、皆さまのそれぞれの地域で、そして創造都市が日本中で展開されるようになることを願って、私の挨拶とさせていただきます。今日は本当にありがとうございます。どうぞよろしくお願いいたします。

レクチャー１ 「今後の文化政策とアジア芸術創造都市」

講師：平田 オリザ

プロフィール：劇作家・演出家。内閣官房参与、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授、日本劇作家協会常務理事などを務める。著書に『芸術立国論』（集英社新書、2001）、『演劇の言葉』（岩波書店、2004）など多数。

1. 地方都市の画一化と危機

今日は、創造都市の理念について、私なりの経験から話をさせていただければと思います。

1 年の半分くらいを、海外を含めた東京とは別のまちで過ごしています。ワークショップでも劇公演でもどうしても地方での生活が多くなりますが、この 10 数年感じるのは地方都市の風景が非常に画一化してきたということです。国道のバイパス沿いにショッピングセンターができて中心市街地がどんどんさびれていく。

僕は 1979 年に初めてアメリカに行きましたが、当時のアメリカの都市の風景に非常に似てきたなと感じています。中心市街地はスラム化して、白昼でも立ち寄れない、白人中産階級は車でショッピングセンターに行って帰ってくるだけという、コミュニティが分断されている都市がほとんどだったわけです。日本はまだこれほどひどくはないですが、地方都市の中には中心市街地の空き店舗がいわゆる不良少年たちのたまり場なんかになってしまっていて犯罪の温床になりかけているという報告もある。それぐらい地方都市が危機に瀕しているということです。

こういった危機はこの 2、30 年の風景です。バブル前後から消費社会が全国に波及した。これは決して悪いことではありません。どんな地方に居る人でも安くて良い商品をいつでも手に入れることができるようになった。しかし、この利便性を獲得していく過程で私たちは失ってしまったものもあるのではないかな。そのなかで、経済活動からみると一見無駄に見える時間や空間を失ってしまったのではないかな。空間と言うのは「となりのトトロ」に出てくるような鎮守の森とかの空間です。あるいは、神話や伝統芸能の継承といった時間、そういうものを失ってきてしまった。



2. 商店街はセーフティーネット

中心市街地、商店街がさびれていくと、最初に無くなるのが床屋さんと銭湯だといいます。商店街の床屋さんは情報を交換する場、コミュニティスペースだった。例えば子どもが駄菓子屋さんに10円玉握り締めて買いに行きますね、普段は。それが1万円札を握り締めて買いに行ったら駄菓子屋さんは注意するわけです。僕はこれを無意識のセーフティーネットと呼んでいますが、この無意識のセーフティーネットが張り巡らされていることによって、商店街とか地域社会は維持されてきたのだと思います。私は駒場の商店街で育ったものですから、子どもが人の家に預けられるというのは普通のことなんです。

3. 市場原理の荒々しさとやせ細るコミュニケーション

今はコンビニやマクドナルドに子どもが500円玉で買い物に行こうが、1万円札で買い物に行こうが、アルバイトの店員は黙ってレジを打つわけです。効率化すればするほどコミュニケーションというのはやせ細っていく。特に、こうした消費社会、市場原理と言うのは地方ほど荒々しく働きます。

沖縄県の与那国島には本屋さんがありません。本を買おうと思うと、40分飛行機に乗って石垣島まで行かなければいけない。石垣島に僕の本は置いてないです。僕の本を買おうと思うと、さらに1時間飛行機に乗って那覇まで行かなければいけないのです。

それでは、与那国の人は僕の本を読まないでいいのか。そうじゃないから私たちは2千数百の公立図書館というのを全国に作ってきたわけです。本を読むという行為は憲法で保障されている国民の権利なので、公的に保障しましょうということです。これを公が保障しないとすれば、地方に行けばいくほど読める本は限られてしまいます。無駄が排除され、効率だけが地方ほど優先される。おそらくかつては逆だったと思うんです、地方の方がのんびりした空間があったと思うんですけど、これが消費社会、市場原理が入っていくと、こういったものが一気に逆転し、根絶やしにされてしまう。

4. 地方都市の文化資本が人材を育てる

昔だったら、県庁所在地レベルの都市だったら変わった頑固な親父が居る本屋さん、古本屋さんがたくさんあった。天井桟敷に3年いましたとか、そういう人が故郷に戻って家業を継いで本屋さんをやったりしていた。今雑誌は皆コンビニで買います。本はAmazonでも手に入れられる。でも実は、そういった店舗が地方都市にとっての文化資産、あるいは文化資本と呼べるものだったのではないかと思います。本屋さんで立ち読みをしていると、親父さんが近づいてきて、「お前もいい歳なんだから、そろそろドフトエフスキーでも

読んでみろよ」というようなところが、地方の文学少年、文学青年を育てていく土壌になっていたのだと思うんです。

帯広に「大通茶館」という小さな喫茶店があります。そこに行くと、東京の演劇雑誌、さまざまな戯曲本、全部揃っています。それが十勝地区の演劇を愛する人たちのたまり場になっています。日本を代表する私の友人でもある鐘下辰男という劇作家がいますが、彼は高校時代に学校から帰ると、そこに直行して、とにかく演劇雑誌を読み漁って、周りの大人たちが東京で見てきたお芝居の話をどんどんしてくれる。彼はそこで育ったんです。

そういうのがある地方都市だと、人材が育ってくるということだと思います。今のまま行くと、どんどん地方の文化資本がやせ細っていつてしまつて人材を生む土壌が無くなつていつてしまっているのではないかというのが僕の危機感です。

5. 多様な体験と学びへのモチベーションの持続が大事

どの地方都市も旧ナンバースクールがあつて、その高校に行つて、地元の国立大学に行くことを一番にしている。しかし今は、東京の中高一貫校はどこも東大に何人入るかというのは競っていません。大学に入つてからも学びのモチベーションが持続するような授業をしますということで、学生募集をかけています。

私は筑波大付属駒場の先生と毎年、最先端の国語の授業を作ろうという試みをやっています。ある年は中学3年生に夏休みに永山則夫死刑囚の小説を3冊読ませて、そして後期半年かけて永山則夫の評伝劇を作る。これだけの国語の授業をしました。女子でも、東京の御三家と呼ばれている雙葉とか、桜蔭の子たちは、コンテンポラリーアートやミュージカル、ニュージーランドへの留学などさまざまな体験をしている、それに対して地方出身で勉強だけしてればいいんだ、英語と国語と数学だけやりなさいという風に育てられて、こうした体験をもつ子と出会う、それは18歳の子にはショックです。

これは学力ではないんです。文化力によって差が付いてしまう。あるいは文化資本とこれ呼びますが、文化資本によって差がついてしまう。20歳くらいまでに形成された個人の文化資本が就職や生涯賃金に反映されたりする時代になっている。そうすると、地域間格差がどんどん広がる一方になっていつてしまう懼れがあります。だからこそ、地域に、地方ほど文化政策、あるいは創造都市のような政策が必要なんじゃないか。

6. 新しい出会いの広場、「原っぱ」をつくる

ただし、実はこれは地方だけの問題じゃない。例えば、若者のメッカと呼ばれながら、急速に危険度も増している渋谷という街は、資本の論理だけでまちを広げてしまったために、ヨーロッパのまちなら必ずあるような噴水のある広場とか、公園とかが無い。弱者の居場所をつくつてこなかったんです。しかし、弱者は富に吸い寄せられるようにまちに集

まってきます。その行き場のない弱者が右往左往することによって、どんどんまちの危険度を増してしまっている。これが今の渋谷の現状です。

昔は子どもにも別の世界がありました。ドラえもんに出てくる原っぱみたいな世界があって、ジャイアンみたいな子がいたんですけど、これは学年を超えた交流なんです。しかし、私たちは、そういったものを、すでに失ってしまった。

だとすれば、私たちは現代社会の新しい広場、新しい「原っぱ」を作っていかなければならない。その1つが例えば劇場であり、音楽ホールであり、美術館であり、フットサルのコートかもしれないし、ミニバスケのコートかもしれません。

劇場というのはよく非日常の空間と言われます。経済効率では出会うはずがない人が出会うというのが、非日常の空間だと私は思っています。劇場で、美術館で、あるいは音楽ホールで、中学生とホームレスが出会う、障害を持った方たちとシングルマザーが出会う。その機会をつくるのが公共ホール、公共文化施設の仕事であり、そしてそれを結び付けるのがアートの力ではないのかと私は考えています。

7. 多様な文化のメニューで「緩やかなネットワーク社会」をつくる

さまざまな文化のメニューを用意し、地域の人たちに何かに参加してもらうことによって、誰かが誰かを知っているような社会をつくるというのがこれから大事なんじゃないか。

1980年代以降、欧米の多くの都市が最も力を入れているのは中核に文化施設を置いて、そしてマイノリティの方たちが参加しやすいような文化施設にしていくという取り組みです。ヨーロッパの多くの劇場や美術館で行われているホームレスプロジェクトという取り組みがあります。これはホームレスの方たちにオペラとかコンサートとか演劇に招待する。そこで、精神面でとにかく生きる気力を持ってもらう。これらの施策を文化による社会包摂、ソーシャルインクルージョンと呼ぶわけです。

人間と人間を結び付けるときに非常に強い力を発揮するアート、文化行政や文化施設というものが、ソーシャルインクルージョンの核として機能しなければいけないというのが、今のヨーロッパの文化政策の基本的な考え方だと思います。日本の文化政策、行政やアートマネジメント関係の方々にとっても、非常に重要な考え方になるのではないかと思います。

8. 市民参加の「同心円型」の集客

観光の世界では大阪病という言葉があります。大阪は万博の成功体験があまりにも大きかったために大規模な集客に特化したイベント型の都市政策をしてきたのです。その結果、90年代以降、オリンピック、サミット招致に失敗した。

同心円状の集客、市民参加型というのが新しいキーポイントだと観光業界では言われて

います。ディズニーランドのパスポートは実は浦安市民、千葉県民が一番持っているんです。地元の方たちがリピーターになる。

大阪の成功例は天神橋商店街の繁昌亭という寄席です。これは 2 億円の寄付を集めて、天満宮の境内に 60 年ぶりに復活させた施設です。これができたおかげで、今は日本で最も元気の良い商店街と言われています。1 日の通行客数が 2 万 5 千人ですから、だいたい年間で 1000 万人近い通行客がいる。若手の噺家たちと居酒屋の店主さんたちが飲んで、いろんなアイデアが出て、「それおもしろくないですか」ってイベント案がどんどん出てくるようになった。それで、ますます活性化するようになった。何か夢とか希望とか喜びとかを与えられれば商店街はまだまだ活性化する余地があるというのを証明したわけです。

水都大阪という事業があります。これは想定の倍の入場者数になりました。橋下府知事からなぜやるのかっていうことを厳しく問われたために、アーティストもディレクターをされた北川フラムさんも苦労されて、体験型、教育普及型のイベントを増やしたんです。そのために来場者数がものすごくたくさん来るようになった。ほとんどの展示が参加型、体験型になりました。

9. 金沢の取組み：21 世紀美術館

文化による都市の再生ということで成功事例として一番有名なのは金沢の 21 世紀美術館です。21 世紀美術館は、平成 16 年開業、17 年から本格開業で、初年度で 146 万人、20 年は 156 万 8 千人ということで、この結果、「利家とまつ」が放送された平成 14 年でも、金沢の宿泊者数は 227 万だったのが、平成 20 年には 237 万人となっています。

21 世紀美術館では、商店街、学校などでのアウトリーチ活動があり、市内の小学生全員が、金沢美術館に行くという行政のバックアップもあります。先ほどのディズニーランドと同じで、金沢の人たちは美術館を誇りに思っていますから、親戚や友達が来ると一緒に行く。一緒に行って「私は子どもが小さいから外の施設で遊んでいるから、展示を見ててください」という行き方ができるんですね。だから地元の方のリピーターもたくさん増えるということになります。

10. 富良野の取組み：ラベンダー畑と体験型観光

もう 1 つ例をあげたいのは富良野です。市町村の好感度ランキングで富良野は 8 位なんです。40 年前までは一農村に過ぎませんでした。今、半分は海外からの観光客です。韓国、台湾、シンガポールと、オーストラリアからのスキー客です。ラベンダーというのはもともと富良野にとって主要な農業の品目でした。香水の原料として使われていました。それが全部人工香料に代わりラベンダー畑が潰されていく。その時に富田さんという農家が一面だけラベンダー畑を取っておくんです。そのラベンダー畑が当時の国鉄のディスカバー

ジャパンのポスターになり、「北の国から」の放送が始まって、一気に富良野ブームが訪れます。

しかし、これだけだったら、一過性の集客で終わったと思います。富良野の方たちが偉かったのはラベンダー摘み体験とか、香水工場の見学とか、さまざまなアイディアや付加価値を加えることによって体験型の観光に変えていったんです。第一次産業を自分たちの力で第三次産業に転換したということです。僕はこの 8 年富良野の小中学校でモデル事業をやってきました。六郷中学校という「北の国から」にも出てくる中学校があります。15 人の子供、全学年が対象ですが、お父さんも農作業を休んで見学に来るんです。これから農家ほどサービス業的な感覚、アイディア、柔軟性、コミュニケーション能力とか、そういったものが必要になるんだという意識を持っている。だから演劇に対して、あるいは文化活動に対して意欲的なんです。

いったんブランドが確立すると、どんどん新しい商品開発ができる。富良野メロンも富良野かぼちゃも、他の道内のものと比べても 2、3 割増しの価格を付けても売れる。無農薬の厳しい基準で生産者表示をしますが、そこにはブランドイメージのバックアップがあるということです。

1.1. 文化の自己決定能力。まず自分たちで楽しみ誇りをもつこと

それに対して、富良野の隣の芦別というまちの話をします。これはちょっと悪口を言うので、大変申し訳ないのですが、五重塔、大観音、三十三間堂を模したホテル、モノレール、回る聖徳太子像、カナダ村が広がっています。でも人 1 人通っていない。なぜこうなってしまったか。自分たちの価値が何であり、どんな付加価値を足したら人が来てくれるかを自分たちで考えなかったからだと思います。自分たちで考えなかった理由は簡単です。旧産炭地でいくらでも地方債を発行できたからです。繁昌亭があれだけ賑わっているのは、天神橋筋商店街の旦那衆が自分たちの寄付の 2 億円で建てた建物だから、愛着があるんです。だから、一生懸命それを活性化しようとするんです。

日本の地方都市にはもっと醜悪なものがたくさんあります。自分たちの潜在的な文化資本がどこにあるかを自分たちで判断できなかつたら東京資本にあっさり騙されるということだと思います。私はこれを「文化の自己決定能力」と呼んでいます。自分たちで、自分たちのことが判断できなければ東京資本はハイエナのようにお金のあるところに集まってきて、借金をとにかくさせて、「大観音できたら客が来ますよ」と言って、これがこの 20 年間の日本の文化行政、あるいは地方行政がやってきたマイナスの 1 つの側面なんじゃないかと思っています。大事なことはソフトの地産地消です。自分たちでソフトを生み出して、まず自分たちで楽しむ。そして、そこに付加価値を付けて、外からもお客さん呼んできて、さらに収益を上げるっていう産業構造に変えていかないと地域社会の復興は無いのではないかと思います。

12. まとめ：地域社会の文化資本の復興から地域の復興へ

かつては日本の地域社会にはそれぞれ文化資本があった。四国の宇和島藩は10万石の小さな藩ですけども、江戸後期には当時の日本で最も蘭学が盛んで、高野長英も大村益次郎も一時期滞在するくらいの非常に文化的な水準の高いまちだった。

明治以降、140年間徹底的な中央集権を行ってしまった。江戸時代に蓄積してきた地方の文化資本を食いつぶす形で、これまではどうにかやってこれたけれども、これが明らかに限界にきているというのがいまの状況ではないか。ここから先はどんどん地域の文化格差が広がる一方になってしまっているというのが、今の状況なんじゃないかと思います。

これからは、新しい公共、公の力で、創造都市というような施策を取っていかないと、地域の復興は難しいという時代になっているのではないかというのが、私の基本的な考えです。このことが、また新政権の新しい公共、地域主権というものとリンクするような形で今、新しい文化政策が始まろうとしているとお考えいただくと良いのではないかと思います。

最後に、アジアの芸術都市について少しだけ触れます。日本経済新聞社主催のアジアフォーラムというのがあり、そこで鳩山総理がアジアにヨーロッパ文化首都に準じるようなアジアの芸術都市を宣言されました。リー・クアンユーさんが非常に高く評価してくださったということです。そういうことがあって、文化庁の方でも概算要求の中にそういったものを入れております。

アジアの多くの国が日本も含め、開発独裁に近い形で中央集権で、経済効率優先でやってきた。しかし、これからは、文化力、あるいは文化資本を政策的に分散させない限り、社会の重層性、国家の重層性が失われてしまって、最終的には国家の競争力が弱くなってしまうと思います。ヨーロッパよりもアジアにおいてこそ、これからは創造都市という政策が非常に重要になってくるのではないかというのが基本的な私の考えであり、そういったことを多少政策にも反映できればなという風に思っています。どうもありがとうございました。

<質疑>

(質問)

横浜で学校を経営しています。お話の中で、地方と東京で大きく文化資本に差が付いているということでした。それでは、どうしたら未来を担う若者がその地方の良さというか、地方の文化をアピールできるような未来を作っていけるか、若者をどうやって教育していけばいいか、先生にうかがえればと思います。

(平田)

まず、地方の文化施設に雇用を場を確保するということだと思います。私も取り組んでいます劇場法は、劇場を1つの核にして、そこに若い人の雇用を確保する、社会参加の場を確保するということです。演劇を創造したり、人と人が出会ったりする場所に劇場の役割をきちんと規定していくというのが劇場法の一番の目玉なのです。そうすれば地方にも有能な人材がプールできます。僕は劇場とか音楽ホールとか美術館は「才能のダム」だと思っています。才能をダムで堰き止めて、東京に行かないようにさせれば良い、あるいは東京にいったん出た人が戻れる場所を作っておくことが大事です。

(質問)

建築をやっています。アジアの芸術都市構想という話をお聞きしましたが、香港や台湾で大きな文化のプロジェクトが動いています。

その一方で、日本では、アニメの殿堂が反対されてしまった。新しい産業なり、新しい文化っていうものをキーワードに動こうとすると、何かアジアの国の方がどんどん先に行ってしまうような感じが僕には感じられるんですけれども、日本では本当にやっていけるのかというのをお聞きしたいと思います。

(平田)

シンガポールの文化政策も、今日の話でいう同心円状の集客です。かつて観光客の一番の目的はショッピングでしたが、シンガポールドルが高くなるにつれて、観光政策を転換しなければならなくなりました。シンガポールを中心にした華僑の人たちがリピーターで来てもらえるような観光政策に変えようということで、東南アジア最大のコンサートホールをつくり、オーケストラを有し、劇場、オペラハウスと全て整備してきたわけです。

それに対して香港は、シンガポールに対抗するような文化政策をしようというのが今の政策だと関係者からは聞いています。

日本の問題点は、たとえば空港を99個も作った。長期政権の中で自浄作用が働かなくなってしまった。しかし、今度、国交省はスーパー中枢港湾を2港に絞ったわけです。国交省は大きく舵を切りました。このように、良い意味で政治主導が働けば変わります。

だから逆に言うと、今までみたいにバラマキじゃないから、地方もちゃんと競争をしなければいけない。健全な競争状態を作るとというのが政府の役割だと思います。地方が「じゃあうちは映画祭やります」とか「音楽祭やります」とか。全部フルスペックではなくて、地方ごとの文化政策がちゃんとできるかどうかというのが、今後は問われてくると思います。

(以上)

レクチャー２ 「文化資本の経営と創造都市」

講師：福原 義春

プロフィール：株式会社資生堂名誉会長。東京都写真美術館館長、(財)かながわ国際交流財団理事長、(社)企業メセナ協議会会長、東京芸術文化評議会会長、ほか公職多数。2010年8月より文部科学省参与。主な著書に『文化資本の経営』（ダイヤモンド社、1999）、『だから人は本を読む』（東洋経済新報社、2009）など多数。

1. 文化資本と企業経営

私はこれまで、経営の世界で文化資本という概念が有効なのではないかと、いろいろと考えてきました。経営資源といえばヒト、カネ、モノと言われてきたのですが、これらに加えて文化があり、文化が無ければ人も物も金もうまく動かないと考えています。

平田オリザさんも文化資本という言葉をお使いになりましたが、これはフランスの社会学者のピエール・ブルデューが提唱したもので、生まれた時の環境はどうか、あるいは家族のステータスはどうであるかによって、人の一生は決まるというような意味に使われています。

それと言葉は全く同じなのですが、私どもの考えたのは少し違って、会社経営においてヒト、モノ、カネ、さらに文化というものを重要な資産と捉えて、次の経営の元手にすべきという考えです。元手としての文化は有形無形の利益を生むし、年月を重ねれば必ず元手は増えていきます。ですから、会社には、ヒト、モノ、カネを司る人事部、生産部、財務部があるのならば、文化のキャピタルを動かしていく文化部が会社の中にあってしかるべきと考えたのです。

福井憲彦先生や山本哲士先生など数人で研究会を開き、1999年には『文化資本の経営』（ダイヤモンド社）を出版しました。そこで私は文化を過去の産物の遺物ではなくて、次の経営の元手として生かされるストックであると考えて、文化資本と呼んでいます。これについてはオーストラリアのマコーリー大学のデヴィッド・スロスビー教授。あるいはオランダのエラスムス大学のアージョ・クラマー先生等から評価していただいて、文化経



済学や経営の世界にも文化資本という言葉が使われるようになっていきます。

経済資本の蓄積と、短期的な利潤の追求に重点を置いた 20 世紀型の企業活動を越えるために、企業に蓄積された、経営の元手である文化資本を経営の基準に置いて、人間性や地球環境にも配慮した経済活動のかたちを考えるというわけです。

2. 文化資本の形成

文化資本の形成過程ではさまざまな資本の転換と生産が行われるのですが、山本哲司先生によると、次の 4 つの動きがあります。

第 1 に、歴史的な象徴資本を文化資本に転化して生成する文化的な再生産。

第 2 に、蓄積されてきた経済資本を文化資本に投下して、生産する文化生産。この 2 つの生産と再生産によって新しい創造力を喚起するような力の働きは、次の 3 と 4 の働きにつながっていきます。

第 3 に、文化資本を経済資本に転化して生産する創造資本。

第 4 に、文化資本を象徴資本に転化して生産する象徴資本があり、この 4 つで一巡ります。3 番目にあげた創造資本の意味は既に持っている文化力を経済化することなのですが、単なるものづくりではなくて、ものにまつわる情報や雰囲気を含んで、場所にあった商品づくりとして創造的な領域を開いていくことを考えています。4 番目については、文化の力を象徴の力に表象することで、象徴資本化することです。これはコーポレートアイデンティティを兼ねた象徴力の持つ空間づくりはその典型であります。これからの社会ではこの 4 つの動きをサイクル化することが重要であり、特に 3 と 4 の働きが重要であると考えています。そうした文化資本の理念から、クリエイティブな都市政策の観点も交えて、より良い未来社会の創造はどうするかということを考えてみたいと思います。

3. 豊かさの大逆転

現在は人類史上稀な時代の節目だということを再認識して、私たちがそういう時代に生きることの意味を考えてみたいのですが、現在の日本は成長性も鈍り、国民の生活水準は必要最低限レベルを越え、不自由のないレベルになっています。しかし、生活水準が向上したにもかかわらず、全ての人が「満ち足りたがための不足感」を覚えているというのが現状です。アメリカの社会学者ダニエル・ヤンケロビッチは 1981 年にアメリカと日本で『ニュールール』という本を出しました。その本には「豊かさの大逆転」という章があり、「私たちは今や質が劣る高水準の暮らしをしているのだ」という指摘がなされています。そして、高水準だけど質の劣る暮らしの例として、「初めは自己を生かすために働きだした女性たちが、今では住宅ローンを支払うために働き続けなければならなくなっている」という、厳しい現代社会の批判をしています。

物質文明や技術文明は 20 世紀に頂点に達し、人間を豊かにしてくれるはずだった機械や技術に人間が使われるようになってしまって、IT 技術の便利さは疑いようもないのですが、実際の生活では携帯やパソコンに時間を奪われてしまっているというのが現状です。日本は先進国の中で自分を幸せだと感じる国民が最も少ないということが内閣府の調査で示されていますが、人間というのは科学技術の進歩や合理的な行為の追求だけでは全ては満たされず、どこかでそこから脱却して、精神的豊かさ、あるいは幸せを求めなければならないということに気がついたのですが、ただ気がついただけに終わっています。日本の生活水準は高いレベルをキープしていると言ったわけですが、そのグローバルな地位を相対的に考えると、政治、経済、産業、教育、文化など、あらゆる面で国際競争力は少しずつ低下の一途を辿っていると言わざるを得ません。

さらに、経済の相対的な地位の低下と比例して、国民の外向きの意欲は喪失しています。かつて日本人が多く学んだ欧米の大学も現在は中国や韓国からの留学生ばかりです。結局、政府から会社から若者まで、全て内向きになっています。オイルショック以来、バブルとその崩壊があり、サブプライム問題、リーマンショックをきっかけとする世界金融危機がありました。企業活動はそれらの危機を克服したとも言われますが、私は決してそうではないと思います。その実態は、低成長時代に組織を守るために人を減らし、人件費を切り、コストを切り落として、ベテランの方々を早期退職していただく。こうした方針により企業の中身は劣化しています。あらゆるコストをカットして、見せかけの利益を出しているのに過ぎないのです。雇用レベルも最低限で、企業は余分なことをやっている余裕がありません。実はその余分なことこそ大事だったのですが、そこが忘れ去られてしまいました。

おそらくこの状況で行くと、一時的には利益を確保できても、10 年を超えるような長期スパンで見ると深刻な事態を招くことになるだろうと私は見えています。社会も組織もリーダーも劣化して、経済一辺倒で進んできたこの国の経済優位が危ないとしたら、今後何を基軸にして進んでいけばいいのかというと、もう文化力しかないと考えます。文化はもともと政治や経済が先にあって存在するのではなくて、その国の文化の上に政治や経済が初めて成立するものであり、その国全体の力になります。ですから、文化がなければ、平均化するグローバル社会の中で日本は埋没してしまって、生き残れないどころか、全く見えなくなってしまうのではないかと考えています。

4. フランスとアメリカにおける文化の経済化

先日、経済産業省の審議会に呼ばれ、「文化産業」について話すように要請を受けました。その審議会では、「クール・ジャパン」と呼ばれるような、アニメ、J-POPなどを産業化して、日本の経済成長戦略に組み込むことを目論むものだったのですが、私は、そこで新成長戦略の1つとして文化を産業化するという狙いはわからないでもないけれども、文化を安直に産業化して、経済成長の柱にするというのは文化の消費であって、文化の経済

化とか、産業の文化化にはならないという話をしました。

そして、これまでの国家や民間による大規模な文化政策の歴史を少しお話をしました。世界で文化政策を国家の中心に据えて政策を展開した最初の政治家はフランス第五共和制の初代大統領ドゴールです。ドゴールは1940年にパリが陥落すると、亡命先のロンドンから「フランスは1つの戦いに負けた。しかし、戦争には負けていない」とラジオ放送で呼びかけ、この言葉はパリの市民に勇気を与えました。その後ドゴールはチャーチルから自由フランス国民の首長として承認され、フランスは戦勝国側につくこととなりました。

ドゴールは、文学者でレジスタンス運動の盟友アンドレ・マルローを文化担当大臣にすえました。マルローは文化政策について「過去の才能を蘇らせ、今日の才能に生命を与え、世界の才能を受け入れる。それによってフランスの夢を叶えようとする」と述べています。このコンセプトが貫かれ、さらに、ずっと後のミッテラン内閣ではジャック・ラングが文化大臣となって財政の1パーセントを文化予算に充てる決議を行い、文化国家フランスの姿をつくりました。

フランスでは20世紀にオートクチュールを中心とするファッション産業が誕生し、実用品だった衣料品産業が文化にまで高まったわけです。1960年代からはパリコレが始まり、世界中のバイヤー、ジャーナリスト、デザイナー、そして彼らの顧客であるV.I.Pが年2回パリに集まって、繊維やファッション産業が活性化したのですが、このとき同時に、レストランやホテルなどファッション以外の産業も都市文化に寄与しています。

現在、パリコレの主役はフランス人だけではなく、日本人も数多くいますし、重要なのはベルギー、イギリス、アメリカの戦略的にファッション界を切り拓いていこうとしている学校の卒業生が居ることです。これが半世紀にわたって世界に発信するような、パリコレを支える力であったのです。「過去の才能を生き返らせ、今日の才能に生命を与え、世界の才能を受け入れ、それによってフランスの夢を叶える」というドゴールとマルローの理念に基づいた文化力の象徴ともいえるものでしょう。

フランスとは別の方法で文化を経済化した稀な例として、アメリカの文化政策と、層の厚い大衆文化の発展があります。アメリカが20世紀のコンテンツ産業の柱になった背景は1930年代のニューディール政策です。TVAが有名ですが、1935年からは芸術文化支援策「フェデラル・ワン」を開始しました。「フェデラル・ワン」は連邦美術計画、連邦音楽計画、連邦劇場計画、連邦作家計画、歴史記録調査という5部門からなり、たとえば劇場計画、では連邦政府の強力な指導によって劇場が一時国営化しています。

さらに作家計画によって、作家や役者、画家など失業中のアーティストは国に雇用され、文化による地域の活性化を目指しました。国による支援によってオーソン・ウェルズやアーサー・ミラーなどのアーティストを育てられたのですが、これと同時に全体主義化していくヨーロッパから逃れてきた教養人もその活動に加わったことも大きな意味をもっていたと思います。アメリカは歴史的蓄積のない国ですが、ギリシャ、ローマ以来の古典を基礎とする欧州の教養がアメリカの大衆文化の質を高めたのです。さらに、結果として行き

先のない米国資本がこれに合わさって、ブロードウェイミュージカルやハリウッド映画などの文化芸術産業の繁栄と莫大な経済効果を生み出すことに繋がったといえます。

5. 日本文化の発展契機と戦後のアメリカ化

日本の状況を見てみますと、私は日本文化にとって大きな発展のきっかけは2つあったと考えています。1つは奈良・平安、あるいは天平文化であり、もう1つは明治維新です。天平文化では漢字が入り、そして漢字をそのまま使っただけではなく、ひらがなとカタカナが作られ、漢字とかなの併用という文化が誕生します。天平文化の流れがその後の室町時代や江戸時代の文化にもなり、洗練され、発展していくのですが、私は天平時代の日本が受けた衝撃とそれによる日本の文化の発展はとても大きかったと理解しています。

2度目の衝撃は明治維新の開国によるものです。開国によって先進的なヨーロッパやアメリカの文明を入れて、大きく飛躍していくのですが、その中心となった人々は古典文化を持っていた上に、新しい文化を吸収しました。さらに、1945年以後のアメリカ文化の流入は私たちにとってもう1つの文明を作る大きなチャンスであったはずなのですが、ただアメリカナイズすることが大事であると考えて、大学の制度も全てアメリカ化してしまい、結果、今日の色々なレベルの低下を招いたのではないかと思います。日本は近代化と西洋化を同時に行ってしまったために、日本を失ってしまったと思います。

6. 矛盾をバネにする創造都市

こういったことを踏まえたうえで、今は次なる日本にステップアップすることが必要な時代ではないかと思っています。グローバル化が進むとどうしても平均化して混ざり合うのですが、現実にはグローバルな世界での平均化に抗して、アイデンティティを確かなものにして保持しようとする力が発生します。そのような「均質化の中の特異性」を見出そうとする力が、こんにちの創造都市、クリエイティブシティを生み出したと考えています。ミラノ、ボローニャ、バルセロナ、ビルバオ、ナントなど様々な例が登場し、その後も多くの都市が創造都市を目指しています。

これらの都市をみていますと、パリやロンドン、東京のようなメガシティではなく、規模としては第2、第3の伝統文化を蓄積している地方都市です。例えば、ナントの例では、奴隷貿易や造船の失敗といったつらい記憶を持っていて、そのつらい記憶、経験を転換して、新しい文化を作ろうとするものでありました。また、ビルバオもナントと同じ造船のまちです。フランコ将軍に包囲されて、都市が破壊された歴史を持つのですが、1989年のビルバオ大都市活性プランによって、グッゲンハイム美術館の誘致が成功し、世界の大都市からビルバオ行きの直行便が飛ぶようになりました。このように、都市における一時の繁栄と、その後の衰退に対するコンプレックス、あるいは中央権力との軋轢、衝突という

ような記憶がばねとなり、その蓄積の上に市民参加の創造都市づくりをやっていくという時代であり、国と国ではなくて都市と都市とが交流する時代であるともいえます。

社会学者のサスキア・サッセン教授は、「本当の都市は企業化せずに生き続ける」と提起されており、東京、ニューヨーク、ロンドンといったグローバルシティは何かを失い続けるのと同時に、犯罪や貧困といった裏の現実も含めて、新しい何かを受け入れ、そして、巨大さ、乱雑さ、さらには偶然の力による都市の力がナレッジキャピタルともいうべき価値になるとおっしゃっています。また、一橋大学の野中郁次郎先生は「創造都市はイノベーションの連鎖が自動的に起きるアジャイルシティになりつつある」とおっしゃっています。

7. 自らが楽しむところに創造都市

いずれにしても創造都市は1970年頃から発生した概念なのですが、段々と創造都市の意味が変わりつつあると考えています。イタリアの社会学者であるフランシスコ・アルベロニはなぜ世界中からイタリアへの観光、イタリアのファッション、家具などが好まれているのかについて次のように述べています。「イタリアは徹底した個人主義の国である。それにより、たとえば個々人が自分をいかに美しく装うか、自分をいかに美しく見せるかを懸命に考え、結果として国内のファッション産業が栄えるのである。さらに、イタリアではごく少数の友人たちを家庭に招いて食事をするという習慣があるが、友人を招くのに際していかに美味しい料理を出し、いかに美しいインテリアの中で食事をするかというのが重要な価値観となっているのである。そのため、イタリアの家具などは非常に質が高い。このように、なによりイタリア人が自分のことを考え、自ら生活を楽しんでいる。それによってもたらされたものを、皆さんが見に来られるのです」と。

そこに住んでいる人たちが生きがいを求め、そこに住んでいる人たちが楽しめるということを平田さんもおっしゃいましたが、付け加えれば、ローマ時代の皇帝やメディチ家があんなに立派な芸術を集めたのは一体何のためかといえば、1000年後、2000年後に日本から観光客を呼びよせるためではなく、自分たちの権力、自分たちの欲望を満足させる、あるいは自分たちの美しいものを見るという欲望を満足させるためであったのです。

例えば、500年前にキリシタンの遺産を博物館にしたて、東京の人にお見せしようとしてもなかなか狙い通りにいかないのですが、それよりもまず、そこに住む人たちに何をもって喜んでいただけるかということが大事なのです。しかも文化力というのは場と切り離してできません。例えば京都の旅館を麻布に持ってきて成り立つかといえば、成り立たないと思います。京都の人の生活感覚があって、それを知る仲居さんがいるからこそ、その空間が成り立つのだと思います。場と、再び文化遺産として取り戻していくものと、両方を考えないといけないし、古いものも現代に活かさなければいけない。さらに他の世界で考えているものも取り入れなければならないと考えています。

もともと日本文化は海外にない、私たちが気付いていない立派な価値を持っています。だからといって、それを単に売り物として輸出するだけでは本当に浅い考えだと思います。まずは日本人が日本文化の価値を認めて、それに通じて日本人が豊かになること、日本人自身の喜びになることを創造する。それを見に海外の人々も来るという状況でなければならないと思うのです。しかも人が訪れるといっても、現在では単に「フランスに行く」ことに価値を見出す時代ではなくなってきました。「パリのムーリスに食事をしに行く」、あるいは「ベルリンにベルリンフィルを聴きに行く」というような、そこで見出すことの出来る固有の価値が大きくなればなるほど、都市の文化資源になってくるのだと思います。

横浜の例を取ると、私は子どものころから父に連れられてときどき遊びに来ていましたが、異国の風が吹き、都市にエキゾチックなハイカラさがあり、それが何とも言えない横浜の雰囲気を作っていました。それは明らかに横浜の大きな遺産だと思います。横浜トリエンナーレの過去 3 回の例をみても、いまや横浜の人たちは自らがクリエイターになりたがっているようですし、観賞者やボランティアの人たちの参加も増えました。要するに市民参加の熱が高まっていると思うのです。その結果、では今後いったい何ができるのか。

横浜は、異国から吹き込んで都市の魅力をつくった風を、次の時代には市民参加による、文化を開放化した世界で、昔の横浜とは違った魅力に高めて、別の何かを創造しなければならない。そういう都市文化の魅力を、今度は横浜からの風として世界に送るために一体どうあるべきなのか。さらに、私たちは今、文化に参加して、文化を作り、楽しみ、支えているのですが、そうしたことは 100 年後の日本にどんな価値を残していくのだろうか、次の世代にどんな意味があるのだろうか。現代の文化と将来の文化、創造都市の在り方については、今のまま満足してはいけないのであって、次なることを考えながら発展させていかなければならないと考えています。

<質疑>

(質問)

企業メセナについてお聞きしたいと思います。イタリアでルネッサンス期に文化を支えたのは大富豪のメディチ家でしたが、文化の発展の裏には、文化を理解する企業の存在が必要ではないかと考えています。日本もバブルの頃にこぞって企業が様々な文化活動にお金を出しましたが、バブルが弾けると、その額も小さくなってしまいました。その点も含めて企業の文化に対する姿勢についてのお考えをお聞かせ願えればと思います。

(福原)

企業メセナ協議会は今年 20 周年を迎えますが、もともと日本における文化は簡単に言うて民営化だったのです。徳川幕府は文化政策をほとんどしなかったと思いますし、地方の

大名の中でも、熊本や金沢といったところだけが文化に熱心でした。そのほかの部分ほとんど豪商や庄屋の方々が文化を支え、それが近世における日本の文化の主要なところになっていたのです。明治時代に入ると、生命保険会社などによる財団がいくつかできて、文化を支えていたようですが、戦争でほとんどダメになりました。財団はあっても資本力がほとんどなくなってしまったのです。戦後になり、企業は社会のいわば共通財産を使っているのだから、企業活動で利益をあげた以上、ある程度はお返ししないと、共通財産そのものが痩せ細ってしまう、それではどうしようもないと私は考えました。

現在、企業メセナ協議会では様々な活動をやっていますが、活動の中心は中規模の企業にシフトしています。しかも、地方の企業等も含めて、文化を支える人たちが変化してきています。それはなぜかという、地方で作ることがその会社の発展に欠かせない条件であるからなのです。よく失われた 1990 年代といわれますが、見かけの経済行動や利益では失われた状況であったのですが、実はその時期に、市民連帯や NPO の考え方が浸透していたという状況も一方でありました。同じように今、メセナの考えも、見かけはそれほど活発になっていませんが、かなりしっかりした思想を持った方々が文化を支えていると思います。今後とも外から観察しながら応援していただければと思います。

(質問)

銀座は 1 つの日本の文化であるとか、先進的なスタイルの象徴的な場であったと捉えているのですが、それが昨今ちょっと様子がおかしいと私は見ています。長年銀座にいらっやって、あの空間をどういう風に考えられているのか伺えればと思います。

(福原)

銀座の話をする、必ず最近の銀座は変わってしまったと言われますが、銀座はだいたい 20 年ごとに変貌しているのです。戦後のことから申しますと、衣料やファッション関連、例えばコシノ三姉妹は皆さんあそこでお店をお持ちでしたが、そういう時代があり、それから画廊が一番多い時には銀座だけで 600~900 軒あったとかという話もあります。今でも 300 軒程度ありますがこれは世界でもまれなことだと思います。

またある時期には、銀行など金融業がどっと進出したのですが、バブルが弾けると銀行がなくなってしまいました。そこにヨーロッパ系のファッションブランドが続々進出して、最近では三越が新しいタイプのデパートをつくりだしています。銀座には H&M やユニクロなど低価格帯の店舗も出ていますが、こういった店舗が混在していくとまた銀座のまちも変わってくるのです。常に銀座は変化しています。これで良いのかって言われることもあります、そういう変動が活力や鮮度に寄与する部分もあって、依然として銀座は銀座なのです。

明治五年に、明治政府が銀座を作ったときのコンセプトは 3 つありました。1 つめは外国から来ている人たちに日本の文化の良い物を見せる。2 つめは日本の人たちに外国の文

化の最先端のものをさせる。3つめは防火壁を作り、東京が全焼するのを食い止めるということだったのです。特に1つめのコンセプトがおそらく正しかったことがあり、次々と業種が入れ替わっても、銀座は銀座なのだと思います。

(以上)

レクチャー3 「アートから創造都市を構想する」

講師：吉本光宏

プロフィール：ニッセイ基礎研究所主席研究員・芸術文化プロジェクト室長。文化審議会文化政策部会委員、創造都市横浜推進委員会委員長などを務める。主著に「再考、文化政策」（ニッセイ基礎研究所、2008）、『アート戦略都市』[監修]（鹿島出版会、2006）など。

私は写真と映像を使って世界各国の創造都市にはどういうものがあるのか、あるいは日本では特に NPO が頑張っている地域の事例について話したいと思います。できるだけ現場を見て、自分の目で確かめて、感じたものを皆さんにお伝えしたいと思っていますので、見ていただく写真などは基本的に自分で撮ってきたものです。

PC の具合が悪いので、本当は一番最後に見ていただく予定だった映像を先に見ていただきましょう。先ほど福原会長のお話にもありましたナント市に拠点を構えている、ロワイヤル・ド・リュクスというカンパニーが行った「サルタンの像」という野外のパフォーマンスです。これはアミアンとナントでやった後、世界各国を回っておりまして、ご覧頂いているのはロンドンで行われている公演です。アートから創造都市を構想するというテーマでは、非常に象徴的な作品ですので、是非ご覧ください。

（約 10 分間の映像は省略）



1. 創造都市の変化のトレンド

「アートから創造都市を構想する」ということで、今私なりに考えている創造都市に関連した文化政策の3つのトレンドをお話しして、それから具体例の話をしたいと思います。

1つ目は文化政策の領域、いわゆる政策のドメインというのが非常に拡大していることです。教育の場にアーティストが出向いて、さまざまな活動をすることで、子どもたちのコミュニケーション能力とか身体表現とか、国語や理科の成績まで上がると言われています。あるいは福祉や医療の現場でも、アーティストが施設に出向いてお年寄りやダンスの

ワークショップをしたら、リハビリでいくらやっても上がらなかった腕が、気がついたら上がったとか、車いすに座っていたお年寄りが気がついたら立ち上がって、楽器を叩こうとしていたりとか、そんなことも起こっていると言います。

他にも犯罪者の更生とか防災、環境、外交、ソフトパワーはもちろん、さまざまな領域で芸術の持つ力が見直されてきています。芸術がそうした社会的な意味合いを持った時に、最近カタカナで「アート」と表記することが多くなっています。いわば芸術文化からアートへ、アートによってさまざまな社会サービスが実現するような時代になっている。これがトレンドの1つ目です。

2つ目は文化政策の担い手の多様化です。とりわけ大きいのがアート NPO の胎動です。この数字は少し古いですが、今ではおそらく全 NPO の数は4万件を超えていると思います。これは1日あたり約10件の NPO が誕生している勘定で、そのうちの3分の1が文化、学術、スポーツ等の4号目的を定款に含めております。アート NPO リンクというところがずっとリサーチをしているのですが、アート NPO の数もだんだん増えております。これは2009年の9月までのグラフですが、全国に約2500件のアート NPO があると言われております。

こうした NPO が、使われなかった建物を活用して、いわゆるオルタナティブなアートのスペースというものを90年代以降、数多く作っています。これが、公立文化施設と違った、非常にクリエイティブな活動拠点として、創造都市のトリガーになってきています。そのほか指定管理者制度で民間が公立の文化施設を運営するようになったり、公益法人改革で、ゆくゆくは文化の公益財団が増えるだろうと思います。

それから3つ目が都市政策、産業政策との結びつきです。95年にチャールズ・ランドリーとフランコ・ビアンキーニが *The Creative City* という小冊子を出しましたが、その話は今や世界を席卷するように広まっています。何年前か、佐々木先生が主催された国際会議でランドリーがいらっしゃったときに、今行き詰った世界中の都市が、まるで呪文を唱えるように創造都市と言っているとおっしゃったのが大変印象に残っています。産業分野でもクリエイティブ産業、創造産業がこれからの産業を牽引するという認識が広がっておりまして、3次産業の中でもサービス産業、さらにサービス産業の中でもクリエイティブな産業が、発展途上国も含めて重要になると、国連も提唱しております。

2. イギリス・ニューカッスル

ではどういう都市が創造都市と言われているのか。実は2008年度に横浜市から委託を受けて、私の研究所で調査しました。さまざまな文献、インターネット、あるいは横浜市長名でのアンケート調査もやりまして、創造都市として把握できたのは66都市でした。

具体的にいくつかご紹介したいと思います。最初の例はニューカッスルで、ここは炭鉱、鉄鋼、造船で栄えた都市です。古くは日本の軍艦も作った記録が残っています。80年代にそうした産業が衰退し、失業率が15パーセントと非常に荒廃したわけですが、90年代に巨

大なパブリックアートが Arts Council と共同で作られました。それが今ご覧いただいています、Angel of the North というアントニー・ゴームリーの作品です。幅が 54 メートルで重さが 200 トンという巨大な作品ですが、実はこの作品プランが発表された時、地元の人は大反対だったんですね。

当時の新聞記事の見出しを見ますと、Hell' s Angel とか、Sky high prize とか、A figure of doom。つまり doom ですから破滅ですよ。破滅の象徴とかたたかれ、散々でした。それでもアーティストが現地に赴いてワークショップをしたりして実現していきます。ご覧のようにとにかく巨大なわけですが、造船技術、つまりこの都市で培われて衰退した造船、鉄鋼の技術が作品になって蘇ったわけですね。結果これが大変な話題になって、国内外から観光客が殺到して、市民の誇りになっていきます。私が訪問した時は市役所の方が胸に作品の小さいピンバッジを付けておりまして、いかにこれを誇りにしているかわかりました。

以降さまざまなプロジェクトが行われました。ゴームリーは自分の型を石膏でとって、それを彫刻で作るんですね。これは元製粉工場です。バルチック現代美術センターというものに作り変えました。まちの産業を支えた重要なモニュメントなので、そのまま残すということで、中のフロアを全部くり抜きまして、工事途中にアニッシュ・カプーアのタランチュラという巨大なアート作品を設置する。これも鉄鋼の技術があつてできたことです。こうした取り組みの後に、セージゲーツヘッドという素晴らしいコンサートホールができます。中はこのようになっていまして、他にも古い廃屋をギャラリーや作家のアトリエにしたりしています。

こうした成果の結果、ここはニューズウィークで世界で最もクリエイティブな都市と言われるようになり、2006 年の 6 月に芸術文化のワールドサミットが開催されました。人口 50 万人位のまちですが、今では市民にアンケートを取ると、98 パーセントがアートが無ければ市民、地域の活力が無くなると答えるまでになっています。

3. オランダ・アムステルダム

次はアムステルダムです。アムステルダムは観光でも、それこそ国立博物館が非常に有名ですし、ゴッホ美術館もあるし、コンサートホールではコンセルトヘボウというような素晴らしい施設がありますが、ちょっと違った文化施設が、ここ 10 年あまりの間にできています。ご覧頂いていますのは都市ガス工場の跡地だったところです。建物は廃墟のようになり、土壌汚染が進んでいましたが、アムステルダム市が中を改修して、市民のための公園になり、さまざまな文化プロジェクトが行われています。

これは改修が終わった直後の 2004 年でしたか、大規模な創造都市の国際会議が行われ、リチャード・フロリダの講演などもありました。このように上手く活用するのはあちらの方は大得意で、ファッションショーとか展覧会が行われたりしております。このガスタ

ンクもそのままさまざまなイベントに使われるということです。建物の周辺に小さい部屋があるのですが、そこは劇団の事務所やクリエイターのオフィスになっていたりします。そのうちの 1 つを見せていただいたのですが、アムステルダム 新しい名物になるお菓子の形とかをデザインしていました。そのように創造産業の小さなオフィスが集積する場所になっています。

2 つ目は NDSM と言いまして、これは巨大な造船所の跡です。アムステルダム 駅の運河の北側にありまして、ずっと使われなくなっていました。そこにアーティストの 1 つのグループが目付けて、不法占拠する形で入りこみました。退去させられるのは嫌だということで、市と交渉しまして、コンペをやって、民間のディベロッパーとかと競ってここを勝ち取ります。

彼らのアイディアというのは、この中にアーティスト・ビレッジを作ろうということです。フレームを市が作り、中のアトリエ部分はそれぞれがお金を出して、めいめいの空間を作ると。私が訪問したのは 3 年前ですが、200 名以上のアーティスト、クリエイターがここに暮らしておりました。しかも、アーティスト・ラン・スペース、自治で運営されているということです。これはデザイナーのオフィス。まあ、本当に 1 つのまちができています。クレーンの残骸の先のところに風車を付けて、発電をして、その電気を売るんだというようなことも言っていました。

4. ドイツ・ルール地方

それから続いてドイツです。ルール地方というのはヨーロッパで最大の工業都市ですが、最近アートの工場と呼ばれるようになっています。なぜかと言いますと、残された数々の産業遺構がアートスペースとして生まれ変わっているからです。これはデュイスブルクの鉄工所ですが、ランドパークに生まれ変わって、さまざまなレジャー施設、文化施設があります。このガスタンクは直径 40 メートルくらいあるらしくて、ヨーロッパ最大の屋内ダイビングスポットになっていると聞きます。これはオーバーハウゼンのガスタンクです。とにかく巨大な場所で、クリストの環境にアンチテーゼするような作品が展示されたりしています。

この地域で一番有名なのはツォルフェラインという炭鉱施設です。ここは、世界一美しい炭鉱施設と呼ばれているのですが、100 万平方メートルという巨大な場所が、アートセンターになりつつあります。これはノーマン・フォスター設計のデザイン博物館。敷地の一角にはイリヤ・カバコフの巨大なパブリックアートが恒久展示されています。世界遺産に指定されているので、レンガを全部外して、元通り積み上げて綺麗にしているという、まあ途方ない作業をやっていると聞きました。産業遺構でも歴史に対して、それくらいのリスペクトを払っている例です。これは妹島さんと西沢さんが設計したデザインスクール。修士、博士課程でデザインマネジメントの授業が行われています。

このルール地方は今年欧州文化首都に指定され「ルール 2010」という催しを開催しました。53 の地域、市が参加し、テーマは「文化による変化、変化による文化」というものです。さまざまなイベントが行われているのですが、今ご覧頂いているのはアウトバーンですね。ここで、「静かな 1 日」というイベントが行われました。7 月 18 日です。60km 間を 1 日シャットアウトしちゃって、右側には市民がそれぞれ自分のテーブルを持ち込んで、ランチを食べてもいいし、歌ってもいいし、踊ってもいい。左側はエンジンが使われていない乗り物なら何を持ちこんでもいいということで、自転車とかブレードランナーとかを楽しんだそうです。

これは「立杭のしるし」と言われるプロジェクトのイメージ図で、この地区にあった 900 ヶ所の立杭のうちの 385 ヶ所に、直径 3.5 メートルの気球を数 10 メートルの高さに上げるというものです。閉鎖した炭鉱で働いていた炭鉱労働者に敬意を払って、その誇りを高く掲げ、その炭鉱労働者たちのトークセッションをバルーンの下で行う、それを航空写真で撮ってアート作品にするという大規模なプロジェクトでした。

5. スペイン・ビルバオとフランス・ナント

それから先ほど福原さんの話にもありましたが、ビルバオですね。美術館ができて、大変なお客さんが来て、しかもその半分以上外国人です。結果、すごい経済効果があって、雇用も生み出されました。ビルバオはこのグッゲンハイム美術館はだけが強調されますが、美術館だけじゃなくて、実はビルバオ全体の大規模な都市開発が行われ、新しい空港もでき、国際会議場もでき、それから港湾施設の浚渫工事も行われるという、重厚長大型の都市再生プロジェクトのシンボルとしてあの美術館はでき上がっています。

続いて、ナントです。90 年にエロー市長が文化で都市を再生すると言って当選して以降、文化に大変力を入れています。2005 年にメセナ協議会で行った文化フォーラムに副市長のヤニック・ガンさんがいらっしやいまして、「社会が衰退しているときに、将来の展望を明るくするものは一体何か。我々の運命は一体誰に任せたらいいのか。それはアーティストではないかと我々は考えた」と話されました。ボウンさんという辣腕の文化行政官を引っ張って来て、市の 15 パーセントの予算が文化に投下されていると聞きます。ホームページをご覧になっていただければわかると思いますが、一番左上のトップがカルチャーなんです。それくらい、この都市は文化を前面に打ち出しています。

これは、有名なアートスペース、もとビスケット工場のル・ユニックです。劇場や美術館に改修して、さまざまなプロジェクトが行われています。あと、右側に見えるのがナント島です。造船所があって、すっかり廃れていた工場で、大規模な展示会が行われていました。これは 2002、3 年です。先ほど映像として見ていただいた、ロワイヤル・ド・リュクス of the 巨大な造形物を作る場所としても活用されていました。私は戻ってくるなり、横浜市の当時の創造都市の本部長に象を呼んでくださいとお願いしました、150 周年事業で。

そして、象がクモになって、やってきました。それくらい感動的なパフォーマンスです。

6. アイルランド・ダブリン

もう 1 つダブリンの例を紹介したいと思います。ダブリンの空港から近いところにバリマンという街がありまして、ここは 60 年代に低所得者向けの集合住宅が 3000 戸くらいできました。ところが経済が停滞してスラム化します。麻薬、アルコール、犯罪がはびこって、警察も近づけないというエリアになっていました。97 年にバリマン・サービス公社がここを開発する際に、パーセント・フォー・アート制度で、ディレクターになったアイスリン・ブライヤーさんが、ただ彫刻を置くだけじゃつまらないとアーティストに様々なことを提案させました。

これはボイラーの煙突ですが、それをライトアップするアンドリュー・カートニーさんの作品です。このプランを最初に見た時、市の当局、それからサービス公社もまったく意味が分からなかったと言います。ところが地元の人に大変歓迎された。つまり寒い国の荒廃した地区で、ボイラーは生活の象徴、支えだったわけですね。それが無くなる前にライトアップされたということで、住民のプライドを刺激して大変な人気になった。結果的に、ボイラー室は壊されず、継続してこのプロジェクトが行われたと聞きました。

これはジャネット・ドイルさんという方が行った住民向けのワークショップで、絵を作るプロジェクトです。麻薬中毒の女性たちが 6 ヶ月間かけて 2 つの作品を作ります。1 つはコラージュ作品です。左は「If I were the carton I would rub myself out」と書いています。この方は売春をしていたそうですが、自分がマンガだったら自分のことを消し去りたいと、これまでのことを作品に昇華させています。右の方は「I don't know what I want, But I don't want this life」もう自分は何が欲しいかわからないけども、この生活だけは打ち切りたいというようなことを作品に表現をしています。

この 6 ヶ月間のワークショップのあと彼女たちは新しい洋服を買います。それから化粧とかリラクゼーションとかマッサージとかのセッションを受けて最後に自画像を描きます。つまり生まれ変わった自分を描くワークショップなんですね。この作家は建物が奇麗になる、住宅が奇麗になるということと併せて、中に住んでいた住民のメンタル面も再生していったわけです。

7. アジア・釜山とシンガポール

横浜市の調査では、アジア、北米、太平洋地域も調べ、釜山とシンガポールは現地を訪問しました。釜山は民間のイニシアチブで映画祭が始まり、今や東京国際映画祭よりはるかに力のある映画祭になっています。それをきっかけに国や市が共同で、映像産業の集積を図るプロジェクトを進めております。ここでいろんな方に話をうかがって、横浜市は創

造都市を政策目標に掲げていますと話したら、「こんなに不確実で、あらゆるセクションにクリエイティビティが求められる時代だから、創造都市とわざわざ掲げるのは、もはや陳腐ではないか」と言われたのが大変印象に残っています。

シンガポールはルネッサンス・シティプランを 2000 年に作りまして、それを評価して、ルネッサンス・シティプラン 2、ルネッサンス・シティプラン 3 というのが 08 年にできています。中心部の元国会議事堂がアートセンターになっていますし、元の最高裁判所もイギリスのテート・モダンのような美術館に再生するということで、国の中枢施設をどんどんアートスペースに転用しています。

ここでもリー・クアンユー大学の教授にうかがったことが大変印象的だったので、ご紹介します。シンガポールは政府や官僚が強いんですね。政策をその通り実現して、どんどん成果を出しています。しかしクリエイティビティということに対しては、果たして官僚が作れるものなのかと、気がついている。創造性というのは計画された中から絶対に生まれない。創造性を計画するってことは、実はできない。そのことを彼らは知っているはずで、今は大きなジレンマに陥っているんじゃないかという話でした。

8. 国内各地

それで日本の話なんですが、横浜のことをちょっとだけ紹介したいと思います。創造都市政策が始まったのは 2004 年ですが、実は 2001 年のトリエンナーレでホテルの外壁に設置された椿昇さんと室井尚さんのこの巨大なバッタ作品が先鞭を付けたんじゃないかと思います。なぜかと言うと、先ほどの巨大なクモはリバプールの欧州文化首都イベントでビルの壁に貼りついて登場しているんですね、2009 年です。これを見て、バッタの方が早かったよなと思いました。それくらいインパクトがありました。

創造拠点を作るのが横浜市の最初の創造都市政策だとすると、今は元売春宿だった黄金町のエリアをアートによって再生する。あるいは寿町という、負のエリアにまで創造都市政策が広がってきていまして、第 2 期ではないかと思います。しかし、私は横浜市の創造都市政策の中で、何よりの発端は、みなさんがいらっしゃるこの場所だと思います。元銀行の 2 つをアートスペースに転用するといった時に、市の文化財団に任せず民間に任せようという決断をされるわけです。公募で NPO が採用されて、この建物がバンカートとして生まれ変わって、そこから異分野の知恵とか、そういうものが入ってくるんですね。

同じようなことは全国で起こっています。2003 年の 9 月 14 日に第 1 回の全国アート NPO フォーラムが神戸で行われました。これが今全国で活動しているアート NPO の火付けになったと思います。当時は各地の NPO が孤立して活動していたわけですね。資金もない、人もいない。そこで一度集ってネットワーク組織を作れないか、いやそんなものは絶対いらないよとか、喧々諤々とした議論でした。でも、この時になんとかステートメントを採択しました。アートが現代社会の課題解決に役立ち、それを NPO が推進していくんだと。

以降毎年全国を回りながらフォーラムが開かれております。2回目は札幌で、次が弘前と青森で行われました。以来、意識的に使われなくなった場所をフォーラム会場に選んでいます。これは前橋市の麻屋デパートというシャッター通り商店街の真ん中にあったデパートの建物を会場にしたものです。ダンスが行われたり、空き店舗がギャラリーになったりというようなことが行われています。これはアートネットワーク・ジャパンのにしずがも創造舎（豊島区）ですが、世界初演の作品、あるいはフェスティバル・ドートンヌと共同製作した作品とかが上演されております。大変印象に残っているのが、イギリスのバービカンセンターと共同製作作品の世界初演がここで行われたのですが、その時はバービカンセンターから花束が届いたんですね。こんな古い体育館を改修した劇場にそういうものが届くというのは、NPOの理念とか、志の高さを象徴することだと思います。

神戸にもこういうものがあります。今リニューアルされています。古い写真ですが、淡路島は山口さんという方が廃屋をアートセンターに変えるということで、このレンガ倉庫を使ったフォーラムを行いました。同じく別府ですね。それからこれは大阪です。たまたま今年の1月にコクルームの催しで上田假奈代さんに釜ヶ崎に「超高級」なホテルができているからと言われて、泊まりました。是非皆さんも試されるといいと思います。それから沖縄では2つの市場でフォーラムを行いました。去年は舞鶴にあります大規模な元海軍の煉瓦倉庫です。今年は鳥取の鳥の劇場で行うことになっています。

つまり、アートNPOフォーラムというのは、こういう使われなくなった建物を会場にすることによってアーティストを呼び込み、そこから創造的な活動を地域に広げています。さらに、多くのアートNPOが取り組んでいるのは、遊休施設のアートセンター化だけではなく、アートと市民社会の新しい回路を作っていくことです。いわゆるアウトリーチ的なものですが、教育や福祉、さまざまなものと取り組みながら市民にアートの持つ創造性を体得していただく。そのことによってさまざまな立場の人が社会の問題を解決するクリエイティビティを持っていく。それが創造都市のあるべき姿ではないかということで、日本のNPOがそういうものを推進しているということです。

9. 狭義の文化政策から広義の文化政策へ

冒頭申しましたように、教育や福祉や医療、防災とか産業活性、地域再生、いろんな形に芸術や文化が力を発揮する時代になっています。従来からの文化財の保護とか芸術文化の振興とかを狭義の文化政策と捉えると、これからは広義の文化政策が求められてくると思います。それを図式化してみると、従来の文化政策が中核にあって、その周辺に教育や福祉や産業への応用があって、それらが総合的になるとクリエイティブ・シティになります。日本でありがちなのは、文化が教育に役立つと分かると、その実利的な面ばかりクロージアアップされるのですが、重要なのは周辺領域に効果をもたらすためには真ん中の従来の文化政策がしっかりしていなければいけないということです。

そういうことを文化政策に求められるパラダイムシフトと言っているのですが、これを省庁の政策分野にあてはめると、文化庁は今文科省の中にあるわけですが、経産省も、国交省も、厚労省もみんな関係するわけです。ですから、私は 1 つの案として文化庁を内閣府の直轄にして、総理直轄で文化庁をやって、そこが全政策領域に影響を及ぼしているような図式はできないだろうかと思います。

最後ですが、今日はアートを中心に創造都市を考えるということでお話しをさせていただきました。芸術文化というのはどちらかというと今までは保護される存在であったと思います。芸術的な価値を守り高めるために国や地方公共団体が政策として支援し、民間企業も支援するということでした。しかし創造都市のさまざまな取り組みに見られるように、地域の活性のためにアートはなくてはならない存在になっております。いわばアートを起点にして、新しい社会に向かうべき時代に来ていると思います。それを支えるのは国や地方公共団体だけではなくて、NPO であったり、民間企業であったり、市民一人一人であると思います。以上で私の話を終わらせてもらいます。どうもありがとうございました。

<質疑>

(質問)

大変興味深いお話しでした。一点だけ質問があります。アートを創造都市の発展に活用するというときに、アートの持つ一種の自律性や制御不能性というような問題があると思います。アーティストが新しいカルチャーを作り出すプロセスで、既存の文化的土壌や歴史性と背反するような、逆に都市をダメにしてしまうような危険性が理論的にはあり得るのですが、そういったことが問題になった実際の例はございませんか？

例えば、京都というまちは日本的な、文化的な美を都市の特徴として海外にも国内にも発信しているわけです。そういった美を逆に潰してしまうような動きが出てくることもあり得ると思うのですが。

(吉本)

ご質問にあったことに近い海外の例を私は存じ上げません。しかし同じようなことでよく言われる議論があります。地域活性化にアートが利用されることによって、アートの自律性が損なわれるのではないかという議論です。アートを道具とする、インストルメンタライゼーションと英語では言いますが、そのことによって、アートそのものの存在価値が損なわれるんじゃないかということです。

実は私はそうは思っていないくて、さまざまなところにアーティストが活動の場を広げることによって、新しい表現を生み出したり、芸術の存在領域がどんどん拡大していくと思います。今日はちょっと省きましたが、昔はアートで都市を活性化するというと、大規模

な文化イベントをやってお客さんを呼ぶとか、まちの中に彫刻を置いて飾りのように使うとか、たとえば言うとパソコンのアプリケーションのように使われていたと思うんですが、それが今やいろんな領域にアートが侵入することによって、ある種の OS ですね、さまざまな政策を考える上での基礎的なソフトウェアという位置づけになりつつあるような気がします。

ですから具体的に破壊が起こるのか、起こらないかというのはそのプロジェクトのやり方次第だと思います。破壊が起こらずに、伝統を守りながら新しい伝統を作っていくことがイノベーションの連続だと福原さんの話にありましたが、それが破壊になるか、ならないかは、個々のプロジェクトの中での判断になるんじゃないかと思います。

(以上)

レクチャー４ 「連携による創造都市の発展」

講師：佐々木雅幸

プロフィール：大阪市立大学都市研究プラザ所長、同大学院創造都市研究科教授。NPO 法人都市文化創造機構理事長。主著に、『創造都市への挑戦』（岩波書店、2001）、『創造都市への展望』〔編著〕（学芸出版社、2007）他多数。

私が用意したレジュメはお手元の中に入っております。左側に4点ありまして、右側に私がこの間関わってきた流れを年表風に整理してあります。左側のポイントに沿って、話を進めたいと思います。

はじめに

「創造都市時代」の到来

「世界都市時代」から「創造都市時代」への転換の契機となったのは、2001年の9月11日のテロ事件と、2008年9月15日のリーマンショックでした。後者は、80年ぶりの世界大恐慌をもたらした結果、第2次大戦を経て確立してきた「福祉国家システム」の崩壊を導きました。そのため、それに代わる、新たな、社会システムの再構築が求められており、それは「創造性革命」によらねばならないと思います。

「創造性革命」・システム転換と創造都市

「創造性革命」とは次の4点から成ると思われます。

第1は、文化的多様性を認め合うことです。20世紀の末から進んできた、市場原理主義的グローバリゼーションがさまざまな弊害をもたらしてきました。イスラム原理主義とキリスト原理主義の間の対立と憎しみが拡大して、富と貧困の格差が世界的に広がり、さまざまな軋轢で世界は閉塞状況に陥っています。そこで、互いに文化的多様性を認め合う、少なくとも相手のアイデンティティを壊さないような、調和のとれたグローバリゼーションに向かうことが必要になっています。そのときには、お互いのアイデンティティの違いを認め合うということから出発せざるを得ません。今、ユネスコが「文化的表現の多様性条約」を提起し、そして創造都市のグローバルネットワークを進めようとしている原点がここにあります。



第 2 は、20 世紀を象徴する自動車や家庭電化製品のような耐久消費財の大量生産・大量消費システムが先進国では行き詰まり、機能不全を起こしてきました。とすれば、脱大量生産の文化的生産に向かわざるを得ないのではないか。今 UNCTAD を中心に議論をされている創造経済、クリエイティブエコノミーという概念に、経済的価値と文化的価値が両方両立するような「新しい文化的生産システムを内包した創造経済システム」を展望できないかという点です。

第 3 は、大量在庫になった品物をなんとか買わせようとするシンボル操作としてのブランドから脱却して、本物の価値のあるブランドを消費する、自ら、自分の生活や文化を作り出す文化創造型生活者を産み出してゆくこと。そして生産の場においては大量生産のもとで定型的な非人間的な労働から、半ば職人的な要素を復活させながら創造的な仕事オペラに転換し、それによって文化的価値と経済的価値が両立する財やサービスを作り出すことです。

第 4 に、過去の福祉国家が目標としたケインズ主義的な完全雇用社会フルエンプロイメント・ソサイエティがもはや維持できないとなると、それに代わる、全員参画型社会フルエンゲージメント・ソサイエティへの転換が必要になります。従来型の大規模な公共事業に依存するのではなく、たとえ、給料が安くても、自己を実現できるような創造的な仕事に就き、それを通じて社会と関わり合いを回復する。社会から排除されている人たちにとって、自らの価値を認められるような創造的な仕事がキーになって、社会に参画していく「場」やプロセスを提供することが大切です。

これらの、創造性革命やシステム転換にチャレンジするのが「創造都市」の歴史的なポジションとミッションではないかと考えられます。

1. 「創造都市」とは何か？ なぜ、時代のキー概念となったか？

3 層の文化資本と創造都市

「創造都市」とは「市民の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備え、グローバルな環境問題や、あるいはローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような『創造の場』に富んだ都市である」と定義してきましたが、本日の 3 人の講演に基づけば、市民、企業、都市の 3 つのレベルの文化資本を豊かにするのが創造都市の目標であると言い換えることができます。

都市間競争から、創造都市の連携へ

この創造都市という概念の出発点は 1985 年の欧州文化都市に始まり、それを経て、欧州特にイギリス政府が採用した新しい創造産業政策であり、その流れを受けて、アメリカで出てきた創造階級、クリエイティブクラスの議論であり、日本では福原さんらが提唱され

てきた文化資本の経営。こういったものが 1 つの大きな流れになって展開していると考えてください。現在のところ、欧州とアメリカ、日本、アジアではそれぞれの特徴を持って創造都市が理解され、普及し、消費されています。ヨーロッパの場合は明らかに、製造業をベースにした 20 世紀的経済の次の経済は、創造経済だと考えられており、創造経済の中で社会包摂を実現できるという見通しもあります。アメリカの場合は都市間競争論が前に出ていて、クリエイティブクラスを巡る誘致競争が行われています。また、上海、ソウル、香港、シンガポールなど、アジアにおける大都市間では創造産業を巡る競争条件が大変厳しくなっています。こういった新自由主義的な都市間競争の状況の中で、あえて「創造都市の連携による発展」、創造都市のネットワーク化が持っている意味、あるいはそれが将来に向けてどのように必要かということについて考えたいわけです。

2. 創造都市の多様な発展

創造都市のボローニャモデル

創造都市のモデルは、イタリアのボローニャです。ボローニャにおいてはオペラという言葉が多様な意味を持っています。ラテン語ではそもそも職人の仕事も音楽のオペラも「オペラ」であり、このオペラと一緒に共同で行うことが、コー・オペラ Co-Opera、すなわち協同組合 COOP です。まち全体がひとつの協同組合であるというのがボローニャの創造都市としての原点であり、このまちは「世界中小企業宣言」（2000 年）を発するような職人企業を中心にした中小企業のネットワークシステムと、それから古い街並みを活かして職人工房を保存し、同時に文化と福祉の担い手の協同組合があり、さらに市民参加で議論されているソーシャルキャピタルの最も進んだ事例でもあります。

かつて横浜の飛鳥田市政もボローニャが採用していた地域単位の行政組織である地区住民評議会に学んで、その理念を横浜型に導入して 1970 年代に市民 1 万人集会を開催しています。このボローニャの職人経済は「文化的生産」と言い換えることができ、20 世紀の大量生産と違う、中世から続く職人的工芸的な生産を現代化した形態です。そこには伝統的な職人も居れば、例えば DUCATI というオートバイやフェラーリやランボルギーニを作るようなハイテク職人の技もあります。

ボローニャでは社会的協同組合コーポラティブ・ソシヤーレが福祉、障害者の雇用、そしてホームレスの自立のための市民の協同的な運動として広がって、行政が財政危機でできなくなった仕事を引き受けてきました。その 1 つがピアッツァ・グランデです。最近亡くなった井上ひさしさんの『ボローニャ紀行』という本にも取り上げられていますが、ピアッツァ・グランデというのは「大きな広場」という意味で、ホームレスが自立のために協同組合を作って、まちの中に捨てられている自転車とか、冷蔵庫とかをリサイクル工房に集めて再生しています。さらに、ホームレスになるというのは精神的ダメージを受けているわけですから、イタリアの伝統の仮面劇を通じて精神的に回復していくという事業を

行っています。

2000年にボローニャは欧州文化都市に選ばれてボローニャ 2000 という事業に取り組み、さらに 2005 年にユネスコのネットワークに入り、積極的な活動をしています。

バルセロナと世界文化フォーラム

バルセロナも創造都市の典型の1つです。2004年に開かれた第1回世界文化フォーラム、ユニバーサル・フォーラム・オブ・カルチャーズに招かれましたが、これは3年に1回開かれています。2001年の9.11以来、世界は2つに引き裂かれて、互いに憎しみと戦争が繰り返されています。その世界を結び直すために、アートを触媒にグローバルな対話を行いたいという目的で、141日間に多数のアートイベントと対話が行われました。

私は「文化権と人間発達 Cultural Rights and Human Developments」で発表しましたが、この考え方はインド生まれの経済学者のアマルティア・センが言っているケイパビリティという議論—人間の持っている潜在能力をどれだけ豊かに引き出すか、引き出す可能性や選択肢の多い社会ほど豊かである—に基づいています。都市により豊かな文化資本があり、人々が容易に文化にアクセスし、また、文化を作り出す権利が保障されなければ、人間の可能性は開かれませんか。それゆえ、文化権と人間発達というものこそ最も今の社会に必要なテーマであります。これが私は創造都市をつくるというときの哲学的基礎であると考えられます。

C.ランドリーとクリエイティブ・ロンドン

創造都市の世界的リーダーであるチャールズ・ランドリーが特に強調するのは、都市の問題を解決するための「創造的な場、環境」をどれだけ多様に作り出すかということです。また行政の組織が創造性をどのように発揮できる場になるかということを強調し、この考え方がイギリス政府の中に影響を与えまして、イギリス政府が1997年から創造産業振興策を持つことになりました。

とりわけ、ロンドンでは、クリエイティブ・ロンドンという政策がケン・リヴィングストンという市長の下で8年間継続し、その中で創造産業というものが多数の雇用を生むということ。それから古い火力発電所を現代アートの美術館に転換し、荒廃していた鉄道の駅を改修して、新しいパブリックアートの場所になり、教育の現場においてクリエイティブパートナーシップという形での教育改革が行われました。こういった事業の際に、イギリス政府は予算削減の中で政策の効果評価を客観的に厳密に行い、政策担当者もきちんとしたエビデンスとして効果を残したので、イギリスの場合はたくさんの成果報告があります。創造都市という政策が次の段階に進むためには、3年とか5年経過したら、横浜や、金沢の経験をきちんと総括して、証拠を残して、そして次に進むことは絶対必要だと思います。

ストリートワイズ・オペラと「アートによる社会包摂」

ロンドンで出会った創造的団体にストリートワイズ・オペラというグループがあります。彼らはナショナルギャラリーの近くの聖マーチン教会の一角にあるホームレスのシェルターでホームレスと一緒にオペラを作るというプログラムをやります。実際にロイヤルオペラハウスの舞台にのり、レベルの非常に高いエクセレントなオペラをホームレスが演じるというプログラムです。これは最初に平田オリザさんが言われていましたが、文化によって社会から排除されていた人たちを包摂していくという「アートによる社会包摂」というプログラムとして非常に面白いもので、日本にも大きな影響を与えました。

R.フロリダとクリエイティブクラス

アメリカではリチャード・フロリダの *The Rise of the Creative Class* (翻訳『クリエイティブ資本論』) が創造都市ブームを巻き起こしました。彼の議論で一番面白いのは、ゲイ・インデックスであり、ゲイが多い都市ほど創造性の高い人々が住むという連関関係があるという説です。これを誤って「ゲイが集まれば創造都市になりやすい」というので、いきなりゲイのパレードを企画したという都市もありますが、ゲイが集まると自動的に創造都市になるわけではありません。彼の主張の中心はこのゲイというものが地域社会に居ても OK だということ。つまり、フロリダが強調する「talent」「technology」「tolerance」、3 つの T のうち、寛容性のあるオープンマインドな社会ほど、創造的なアイデアを持った人たちを受け入れる、あるいは排除しないので発展するということです。言い換えると、ヨーロッパで言われてきたソーシャルインクルージョンという言葉は、フロリダはゲイをインクルージョンすると理解したかもしれません。

彼が書いた *Flight of the Creative Class* クリエイティブクラスが逃げ出すという本も面白いと思いました。ブッシュの時代のアメリカが反イスラムということで留学生やクリエイティブな人たちを追い出すことになるかと批判し、彼自身もアメリカ社会に嫌気がさしたのか、あるいはトロント大学がたくさんのお金を用意したのか、真意は分かりませんが、トロントに逃げ出しました。彼が師匠に思うジェーン・ジェイコブズという都市論の大家もトロントに脱出しましたが、このジェーン・ジェイコブズというのはランドリーや私、フロリダにとっても創造都市論の母であります。もともと、ジェイコブズは当時、ベトナム戦争に息子たちが取られるのに反対でニューヨークを離れました。ただ、フロリダのいうクリエイティブクラスは、移動性の高い人たちであり、世界中の都市がクリエイティブクラスの誘致合戦を展開することになるかもしれません。むしろ、クリエイティブクラスが生まれ、十分に力を発揮できるような環境を準備することが必要だと思われます。

3. 連携による創造都市の発展に向けて

ユネスコの創造都市ネットワークと創造経済レポート 2008 (UNCTAD)

世界で創造都市についての関心が広まった中で、2004 年からユネスコが創造都市のネットワークを提唱することになりますが、これに先立って、2001 年にユネスコが「文化多様性に関する世界宣言」を採択します。この背景として WTO で進めていた市場原理主義的な経済原則が文化産業にまで適用されるとフランス、イタリアの文化産業の中心である映画産業までもが潰れる危険性があるということで、ユネスコは文化多様性を維持するために、国連の機関として文化産業の振興と合わせて、創造都市のネットワークを作ることになりました。9 月現在、世界には 25 のユネスコ創造都市があり、日本には名古屋、金沢、神戸、そしてつい最近に上海、ソウルとアジアに広がっているのが特徴で、創造都市のアジアにおけるネットワークというのは今後、重要なテーマになると思われます。

国連貿易開発会議 UNCTAD が「創造経済レポート」を 2008 年に出して、「創造経済」の定義を行い、「創造経済とは社会包摂、文化多様性、人間発達を促進しながら所得と雇用を生み出す可能性を持っている経済」として、今後途上国においても発展可能性が高いと指摘しました。「社会包摂、文化多様性、人間発達」という概念と経済活動とを上手く WIN-WIN の関係に持っていくということが含意されており、ただ単に不況で困っているから古いタイプの雇用を生み出せば良いのではないと思われます。韓国、中国、アジア各国でも「創造経済」に対する関心が非常に高まっていますが、その中で中心に座るのは創造的文化産業だと思われます。したがって、アートが持つ可能性というのは産業と社会包摂と人間発達へと非常に広がって来ています。

モンリオールとサンタフェの試み

ユネスコのネットワークの中で最も積極的な都市の 1 つがモンリオールです。今 COP10 の会議が行われて地球温暖化に対し、どのような取り組みをするか、あるいは生物多様性についてどのような取り組みをするか議論になっていますが、この会議の事務局が置かれているのがモンリオールです。サーカスアートシティと呼ばれているプロジェクトの展開されている場所は、北米最大のゴミ捨て場の跡地で、そこにシルクドソレイユという世界最大のエンターテインメント産業の本部があって、その一帯がゴミ捨て場をアートシティに変えて、環境と文化を両立した地域再生を試みています。そこで議論されるのが生物多様性と、文化多様性との関連であり、従来は別々に議論されてきましたが、モンリオールの COP10 会議の事務局長はこの 2 つを連関させる意欲を示しています。

アメリカの創造都市、サンタフェは人口 56,000 の小さい都市ですが、200 を超えるアーティストのギャラリーとたくさんのアートマーケットがあり、大変文化発信力が強い。プエブロインディアン以来の原アメリカのフォークアートをきちんと残しつつ、そこにコンテンポラリーアートを展開し、世界中からクリエイティブな人たちを招くクリエイティ

ブ・ツーリズムという概念をユネスコとともに提唱しており、他にできない創造的な体験や、感動を生み出すような新しいツーリズムというに挑戦しています。金沢ではこれをクラフトツーリズムという形に置き換えて進めています。

文化庁による文化芸術創造都市表彰と日本の創造都市

2007 年度からは、日本においても文化庁が文化・芸術創造都市を表彰して支援する制度が始まりました。過去 3 年間で、12 の表彰都市があり、創造都市ネットワークを応援する体制が整ってきました。また、先ほど平田オリザさんが紹介された鳩山前首相の演説もあり、来年、東アジア芸術家会議が開催されるなら、その中に東アジアの創造都市を巡る議論も加わって、アジアにおける創造都市のネットワークが日程に上ってくるでしょう。

日本の創造都市では、金沢市の事例で一番大きなポイントとなったのは 21 世紀美術館の開設でした。伝統芸能や伝統工芸の非常に根強い金沢というまちにあえて現代アートを持ちこんで、伝統とコンテンポラリーアートが衝突と火花を起こした。単に伝統があるというだけでは都市や人々の「生きた文化資本」として蘇ってこないのが、現代アートによって眠っている文化資本や文化伝統を呼び覚ます、きっかけが必要だったと言えます。この美術館の隣りに市役所があり、そこで働く公務員の人たちにも創造性という点で大きなインパクトがあったと考えられます。

横浜市が進めた実験の中で一番インパクトがあったのは部局横断型の組織です。芸術文化都市創造事業本部を作って、上から新しい事業を推進したことです。いろんな軋轢はあるが、市役所の「組織の文化」が創造的に変わる切掛けを作ったと思われます。

おわりに

最後に、創造都市をさらに進める上で、文化政策の充実と他の産業分野の政策運営との融合という問題があります。中央政府における文化政策にあたっては、アームズ・ブレンダース原則がきちんと確立したアーツカウンシルが不可欠であると思われます。ヨーロッパの議論を聞くと、カルチュラルポリシーは中央政府がやり、カルチュラルプランニングというのは自治体が推進するという関係が明確になっています。文化計画は他の都市計画とともに市民と一緒に作ることが重要で、文化政策は中央政府がアーツカウンシルを確立して、専門家の意見や評価を入れて、予算配分していくことが重要でしょう。

これからの創造都市政策を深化させるために、国内外でいろいろな経験に学び、交流をする必要があります。そのために、本日の会議のような場、そして創造都市ネットワークというゆるやかな組織を是非、至急に作った方が良く提案します。

<質疑>

(質問)

佐々木先生には大変ありがとうございました。日本のような先進国が今の位置を維持していくためには、ポスト工業化で、クリエイティブ産業を興す必要があるということは周知の事実になっていると思いますが、どういう発展段階を遂げて創造都市に行くのかということをもしあれば教えていただきたいのですが。

(佐々木)

創造都市は多様性こそ命なので、例えば横浜型で、行政からまずプロジェクトを走らせて、経済界や市民とネットワークを広げていくというやり方もあるし、金沢のように経済界がまず議論を起こして、そして行政を巻き込んでいくというやり方もあるし、今の大阪のように行政はぜんぜん予算が無くてやる気が無いので、市民がやろうというというやり方もありますよね。その 3 つのセクターに分けてみたときに、それが上手くバランスを取っていくと一番美しいのですが、それぞれのセクターの成熟度とか発展段階とかいうものによっていくつかのバリエーションが出てくるんじゃないかと、今のところはそんな風に考えています。

(質問)

今日は非常に感動しまして、創造都市論を発展させるというお話の中で、全員雇用型ではなくて、全員参画型ですとか、雇用の中身も問われるという話もありました。で、例えばおいしいリンゴを作るとか、おいしいお米を作るというのも創造的な仕事になると思うんです、特にこれからは。それを考えたときに、創造都市って言われますが、都市だけなんでしょうか。

(佐々木)

今、とっても根源的な話があって、実は農業というのは最も創造的な産業になりえるんですね。まさにそこには職人的な作物を作られる方がいっぱいおられます。ということは創造農村というのはあるということですよね。今日お見えの町長さんのところでいくと、木曽の田中町長のところは創造農村って掲げておられますし、丹波篠山も創造農村だと言っておられます。あえて創造都市だけではないぞと。創造農村があっても良いんじゃないかと。あるいはクリエイティブシティじゃなくて、クリエイティブタウンでもいいということだと思います。その点が創造性の議論の面白いところで、非常にフレキシブルで、適応範囲が広いのではないかと思います。貴重な意見をいただいて、どうもありがとうございました。

(以上)

二日目（９月２４日）

ワークショップ

10：00～12：00

北仲スクール３F

事例報告 1・神奈川県横浜市

報告者：秋元康幸（横浜市 A P E C ・創造都市事業本部 創造都市推進部長）

三種類のまちが隣接した都心

皆さま、おはようございます。横浜に来ていただいて、ありがとうございます。30分ということですので、特に都心部の活性化に焦点を絞って、お話しさせていただきます。横浜は幕府が開港した時に、長崎の出島みたいな形で出来た街です。（地図を指して）この辺が関内地区になりますが、もともと海だったところです。東海道がここに走ってますが、東海道の筋からこの野毛山を登って下ら



ないと、開港の場、関内地区に近づけないという構造で作られています。ですから、意識的に主要街道から離れた所に作られたというところから横浜のまちづくり、都市計画が始まったんですね。

この関内地区が歴史的建造物が数多く残っている横浜のダウンタウンになります。それから横浜駅周辺地区、デパートとか商業施設が多いのはこの辺になっています。関内地区とは全く違った商業ビルが立ち並んでいます。この2つの都心の間に、みなとみらい21の街が出来て、横浜駅周辺とダウンタウンが結ばれたといいますか、都心が一体となりました。そのおかげで古くからのダウンタウンは歴史的な雰囲気が残っていますし、商業施設の立地している横浜駅はビルが建ち並んだ賑やかなまちになっていますし、みなとみらい21は近代的な街という、3種類のまちが隣接して出来ています。これが横浜の特徴だと頭に入れてください。

都市デザインから創造都市へ

横浜の創造都市というのは、都市デザイン活動の延長線上に出てきた事業です。まちづくりは車優先で作られてしまうことも多いのですが、横浜の都市デザインは歩行者優先で考え、歩いて快適な都市づくりを行っています。それからまちの中にコミュニケーションの場を作る、人と人が触れ合えるような都心部にする、といったことが大きな特徴になっ

ています。その他、美しさを求めることとか、歴史的遺産を大切にすることとか、7つの目標を掲げて都市デザイン活動を40年くらい続けてきました。この写真は馬車道の歩行者空間で、商店街のプロムナード化など、横浜が全国に先駆けてやってきた事例です。

2004年に北沢先生（東京大学教授）が委員長の委員会が作られて、創造都市、クリエイティブシティの取組がはじまりました。今までやってきた横浜らしい都心形成、歩行者の空間や、歴史的建造物を残すとか、港らしさを残していくというようなハードな整備にプラスして文化芸術といったソフトを加え、横浜を魅力的な街にしようということです。具体的には歴史的建造物や、倉庫の中で現代アートを展開したりして、新しい都市文化を作って発信していく。そのことによって、都心部を活性化させていこうといった政策です。クリエイティブシティ横浜がどんなことをやるのかというのは、今日お配りしたパンフレットの中に書いてあります。その中で、今日は文化芸術・まちづくり・創造産業の三位一体による都心部の復権についてお話し出来ればと思います。

形成される創造界隈拠点

横浜の創造都市の特徴というのは都心部に点在している創造界隈拠点の活動です。創造都市センター、これは横浜市の芸術文化振興財団が運営しています。それからNPOを主催されている池田さんが運営しているBankART。演劇関係の相馬さんや加藤さんが運営している急な坂スタジオ。それから象の鼻テラス、これはワコールアートセンターに委託して、岡田さんというディレクターが中心になって運営しています。もう1つ大きな拠点は黄金町です。ここは元違法風俗店が集積していた地区をアートの力によって変えていく試みをしている地区ですが、午後からエクスカッションで行かれると思うので、現場でじっくり見ていただければと思います。

この写真が民設民営の創造界隈拠点で、今横浜市でも特に力を入れ始めている拠点です。つい先日の9月11日と12日の2日間、“関内外 OPEN 2”というアーティストやクリエイターの事務所をオープンする事業を開催しました。彼らが集中して入っているビルの1つが本町ビル・シゴカイでネットワークを組みながら活動しています。現在、残念ながらこの本町ビルの建て壊しが決まり、他のビルに移る計画が進められています。もともとは北仲ホワイトというビルがあって、そこで活動していたグループが本町ビル・シゴカイに移って来て、それがまた新しいビルに移っていくことになります。それから創造空間・万国橋SOKO、万国橋のたもとにある倉庫空間です。この中にもアーティスト、クリエイターたちが何人か集中して入っています。有名なところでは建築家の山本理顕さんとか、NDCグラフィックスの中川憲造さんとか、写真家の森日出夫さんとかがネットワークを組みながら仕事しています。そのほか馬車道の天津ビル、これは民間の創造界隈拠点のはしりあたるんですが、高橋晶子さんや飯田善彦さんをはじめ、そうそうたる建築家のメンバーが入っています。その他、いろんな民間のビルにアーティスト、クリエイターが入って

活動しています。この様な活動を横浜市として積極的に支援していこうかと思っています。

具体的な取組事例

具体的な支援制度としては、まずアーティスト・クリエイターを誘致する事業として、事務所の開設にあたりまして、坪 4 万 8 千円、最大 200 万円までの初期投資の支援をしています。それから建物のコンバージョンに対する助成を今年から始めました。これは補助対象経費の 2 分の 1、または平米 3 万円の安い方から 1 千万円を限度に、古い建物の改修費として、ビルのオーナーに助成する事業です。あわせて、オーナーさんにアーティストを集めるためのディレクターを派遣したり、こういった建物に改修したらいいか建築家に相談にのってもらうとか、アーティスト・クリエイターの事務所を開くための支援体制も整えてあります。

その他横浜市ではアーティスト、クリエイターの育成支援として、創造活動助成として、100 万円までを、新しい芸術活動しているアーティストたちに支援する助成事業とか、企業が創造的活動をするために支援する助成事業などがあります。アーティスト支援プログラム助成はアーティストを支援する中間支援団体（NPO 等）に 120 万円まで出す助成事業になっています。またマザーポートエリア活性化推進事業補助金は市民グループや団体に対して、都心部で街の活性化に資するイベントをするときに 100 万円まで支援する事業です。そのほか助成制度ではありませんが、大学との連携も最近積極的にやっています。この会場の北仲スクールもそうですが、7 大学が連携してサテライトスクールを実施しており、横浜市と協定書を結んでいます。

ランデヴー・プロジェクト

それから横浜ランデヴー・プロジェクトという事業を去年から始めています。実はワコールアートセンターに、象の鼻テラスの運営委託をしています。ワコールアートセンターは前に静岡でランデヴー・プロジェクトというアーティストと企業を結び付ける事業をやっていたことがありまして、そのような事業を横浜でもやってくれないかと持ちかけ、新しいプロジェクトとして始めました。平成 21 年度は企業 2 ヶ所と障害者施設 2 ヶ所でアーティストと組んで製品を作りました。今年は文化庁の事業にも採択され、障害者施設に重点的に働きかけまして、今 12 ヶ所程度に拡大しています。

やり方は実行委員を作って、アーティスト、クリエイターが各障害者施設に出向いていろんな相談を受けました。ある施設では、はたを織っていて、きれいな織物だったのですが、あまり売れずに織っているだけだった。これを矢内原さんというファッションデザイナーにお願いして、写真のようなトートバッグを作ってもらいました。これは昨年、象の鼻テラスで売り出しています。この面白いところは、どんな織物が出来るかというのは障害者のその時の気分によってどんどん変わっていくので、全て一点ものしか出来ない

ことです。

そういったものは本当ですと、ものすごい高い金額になってしまうんですが、障害者の方とコラボすることによって、それなりの価格に抑えながらデザイン的にも優れたものを製品化できています。逆に、今まではなんとなく織っていたのが、自分の織物が製品になって売り出せるということで、残業までしてやり始めたという、障害者施設としてはちょっと困った状況も起きています。

この写真の製品も障害者の方と曾谷さんというアーティストとコラボし、ちょっと柔らかい合成樹脂で、色が上手く混じり合わなかった端っこの、今まで捨てられていた材料を、コースターやマットとして販売しています。他にも、今までは捨てていただけだった点字用の紙を使って、のし袋を作ったりしています。また、今まで障害者施設で作ったものをネットで売っている NPO があるんですが、そこと協力して販売を始めたり、10 月から横浜ベイクォーターという商業施設の中でプロジェクトの製品を売る動きを進めています。横浜の創造都市は特に産業との連携が弱かったんですが、この様な試みをしています。

トリエンナーレ&オープン横浜

次に、横浜トリエンナーレを説明します。先日、横浜トリエンナーレ 2011 を横浜美術館と日本郵船海岸通倉庫を中心に開催すると発表しました。今回は横浜美術館の館長をやっている逢坂さんが総合ディレクターとして実施します。基本的にこの 2 カ所が、来年のトリエンナーレの中心です。そこにプラスして、創造界隈拠点、先ほどから施設の名前とディレクターの名前を私はあえて言っていたんですが、そういった方たちにトリエンナーレをやるなら是非連携させてくれと言われており、それをアートプロジェクトと言う形で実施することで話を進めています。ですから、今回のトリエンナーレはコアの部分と、創造界隈拠点のディレクターたちの協力を得た関連事業が連携し、街の中でさまざまなアート事業が展開されるといった形の仕掛けをしています。

もう一つ、OPEN YOKOHAMA という事業を今年から始めました。今年の秋、9 月 10 日から 11 月 3 日まで、都心部で実施される 200 位のイベント紹介したキャンペーンを始めました。トリエンナーレとまちをどうやってつなげていくかというのが、創造都市の大きなテーマでもあったので、来年はこの事業をトリエンナーレと同じ時期に実施する作戦です。トリエンナーレを応援している市民サポーターとも連携を取りますし、NPO としての BankART、黄金町バザール、象の鼻テラス、ヨコハマ創造都市センター、急な坂スタジオ、東京藝大、今年から出来る神奈川芸術劇場、そういったところが連携して、横浜の総合力を発揮して、来年のトリエンナーレをおもしろくしていこうと考えています。

それからまち歩きのツアーを今年は 30 本仕掛けました。来年はもっと多く仕掛けたいと思います。みなとみらいに行って、中華街に行って、帰ってしまうのではなく、なるべくまちの中を回遊し、色々な魅力を探ってもらいたいと考えています。OPEN YOKOHAMA のそもそものコンセプトでもあります。今年は市役所のロビーでアートを飾ったり、市長

の執務室とか、美術館とか能楽堂のバックステージとか、今まで見れなかったところをオープンしていきます。地域のイベントとしても、ジャズプロムナードとか、ビールのオクトーバーフェストとか、元町のチャーマーミングセールとか、本当にいろんなものがあります。今度の土日も各地区でイベントをやっていますので、このガイドマップを片手に回っていただければ、面白いものが見られるんじゃないかなと思います。

創造都市の活動は、将来的にはインナーハーバー構想という、都心部、港を中心としたまちづくりにつなげていこうと考えていますが、ここでは時間が無いので省略します。

(以上)

事例報告 2・滋賀県栗東市

報告者：西川賢司（栗東芸術文化会館さきら 事業担当部長）

京阪神のベッドタウン化するまち

皆さんおはようございます。滋賀県栗東市からまいりました。私は栗東芸術文化会館さきらというホールの事業担当部長をしております西川と申します。文化施設が軸となった取り組み事例を紹介させていただきます。

ここが栗東市です。草津市、栗東市、守山市、野洲市の人口をあわせるとおおよそ 30 万人ですが、栗東市ですと 6 万 5 千人位です。栗東市は琵琶湖の湖南、滋賀県の南部に位置して、北部は平坦地、南部は緑豊かな山地で、1 号線から 8 号線、いわゆる東海道と中山道が分岐しているところなんです。古くから交通の要衝として栄えていました。写真は JRA のトレーニングセンター（馬の）。これは東海道沿いにあります国の重要文化財の和中散本舗という薬屋さん。徳川家康がここの薬でお腹痛が治ったと言われています。それから金勝山という、山手の方は本当に自然が豊富です。我々のさきらがあるのは 1 号線から琵琶湖寄りになります。



人口は平成 14 年が 5 万 4856 人。17 年が 5 万 9 千。現在は 6 万 4 千ですね。総合計画の中では、今後 10 年で 7 万 4 千人位を想定していますが、現在までは流入人口が多く、いわゆる京阪神のベッドタウンとなっています。1 号線から山手の方は旧のコミュニティ。1 号線から琵琶湖側に、新興住宅地が新たに増えるという感じです。これがさきらの場所ですが、JR 琵琶湖線栗東駅の駅前です。さきらの周りにどんどんマンションが建ってきて、マンションの中にホールがあるみたいになっています。

ひとづくり・芸術文化の拠点として「さきら」スタート

平成 13 年、10 月 1 日に栗東町から滋賀県内の 8 番目の市として栗東市が誕生しました。さきらが出来たのが平成 11 年ですので、その 2 年後に単独市制を敷いたわけです。栗東市は住み良さランキング 1 位とテレビで言われたようなこともあって、福祉サービスが良かったり、行政サービスが非常に高かったりしたので、人口が右肩上がりの勢いで増えてい

ました。さきは 1999 年の 10 月 1 日、まちづくり、ひとづくりの拠点、芸術文化情報の拠点、交流の拠点ということで、すでに公立ホールの建設ラッシュが進んだ後の、第 2 クールくらいに出来ました。ちょうどこの 1 年くらい前に滋賀県立のびわ湖ホールが出来ています。

びわ湖ホールの後に出来たことや、ハード先行、箱物批判等も全国であって、当初からさきにしかないソフトを創造していきましょうということで、ミュージカルを作ったり、ジュニア・オーケストラを作ったり、広場の前でこういう交流事業をやったり、いろんなコンテンポラリー・ダンスをやったりとか、多様・多彩な取り組みをしてまいりました。オープン当初は市の外郭の財団が運営して、予算はだいたい 4 億円ぐらいでした。平成 18 年に指定管理者制度が導入されて、それまで施設管理の委託を受けていた JR 西日本総合ビルサービスという会社が指定管理者になりました。私はオープン当初から舞台関係の仕事をしていましたが、新しい体制になった平成 18 年から現在の立場で事業全般を担当させていただいています。

さきらジュニア・オーケストラ・アカデミー

17 年から始めたさきらジュニア・オーケストラ・アカデミーのことをお話しします。本物の音楽を提供する、鑑賞の機会を提供するというのも大事ですが、ホールの今後を支えていく上で、地域のリーダーになっていく子どもたちを育てることが大事です。そこでオーケストラを作ろうという夢を持ちました。楽器を弾ける子どもだけを集めてくればオーケストラはすぐに出来るけど、それはでは面白くない。毎週土曜日に音楽学校のように運営し、演奏経験のない地域の子どもたち 1 人ずつにイチからバイオリンや様々な楽器を教えました。最初から世界的に有名な指揮者である秋山和慶さんに特別顧問という形でお手伝いいただいています。

5 年計画でしたので、今年の 11 月 28 日に第 1 回定期演奏会を行うことになっています。本物の指導者、本物の音楽家たちと直に触れて、子どもたちはすごく説得力のある演奏をしたり、上手いわけではないんだけど、心にぐっとくるような演奏をしたりとか、これは、継続と蓄積の成果ではないかなと思っています。定期演奏会を楽しみにしています。

ボーダーレスアート

また私たちが重点的に取組んでいるのは福祉との連携ですね。先日、日曜美術館をご覧いただいた方はお分かりでしょうが、滋賀県の近江八幡に町屋を改築したボーダーレス・アートミュージアム NO-MA がございます。ここでは障がいのある方たちの作品を中心に、様々な企画展示が行われています。今もパリで展覧会をやられているのですが、滋賀県の社会福祉事業団が牽引してこうした活動を展開されています。その関連で私は主にパフォーマンス・アーツの分野を担当してまして、アウトサイダーライブという展開や、糸賀一

雄記念賞音楽祭という公演を毎年開催しています。手前の写真は南河内の内藤さんに演出いただいたお芝居です。

それと右の方は、近江学園という施設がありまして、障がいがあるという子どもの他、様々な理由で施設で生活する子どもたちとジュニア・オーケストラのメンバーと一緒に演奏しようということに挑戦しました。やる前はどうなることだろう、同じ年頃の子どもたちだからな。。と思いましたが、やってみると、音楽のテーマを与えられた子ども達は、みなおなじく音楽に向き合い、全員が一つのベクトルで前に進みました。全然心配することなく、すごくこれは良い演奏が出来たのじゃないかと思います。

コミュニティアート

それから地域課題です。特にさきらを取り巻く地域は、新住民が増えてきて、コミュニティの意識が希薄化しています。そこで市民が関わりを深めるということに主眼を置いて事業を展開しています。小さいまちだからこそ出来ると思いますが、芸術文化を結節点として、人とまち、歴史景観、それぞれが有機的につながっていくことを目的にしたり、コミュニティアートのプロジェクトをやっています。著名なアーティストがポンと来ているとか、アーティストの内面的表現を何か市民側にぶつけるのではなく、市民参加でいろんなところから出てくるアイディアを吸収しながら、どういう展開が出来るかといったことにチャレンジしています。

これは昨年度ですが、地域のリーダーやボランティアコーディネーターなど人づくりをすることが大事だということで、文化庁さんに文化ボランティア支援拠点形成事業の支援をいただきました。昨日お話しになった吉本さんや全国で活躍されているみなさまに協力いただいて、様々な講座をやってまいりました。その中でさきらボランティア・コミュニティが活動の質や機動力の面で大きく成長しています。登録者は現在 118 人ですが、最初はおもしろいから参加しようかという程度だったのが、今では協働とまではいつてないですが、参画意識が芽生え成長して、コミュニティアート・プロジェクトの主体を担うことができるようになりました。

今年はじまった文化庁・文化芸術創造都市モデル事業

我々が指定管理者になった時に、「民間になったらぐちゃぐちゃになるのでは?」という話があったので、「そうじゃないですよ」と、事業運営全般において、市民に開くことをテーマに考えてやり始めた結果として、さきらボランティア・コミュニティが育ってくれたということではないかと思います。

今回の創造都市モデル事業では、夏と冬にまちぐるみの催しを行おうと考えています。その間に、それに向けてのワークショップを何回も重層的に展開していく。そのあとに振り返りをやって、地域住民が、教育現場が、劇場が、それぞれの視点に立ってのプログラ

ムを開発して、次年度につなげていこう。ちらしの裏にも書いていますが、およそ 50 回くらいのワークショップをいろんな視点でつくっていこうと思っています。その中で地域のオピニオンリーダーを育てることに主眼を置いています。来年度の事業を引っ張ってくれるリーダーを地域の中から作り出すということです。あわせて、新住民が歴史のあるまちとどう触れ合っていくかということで、景観との関連でやられている市の催し等に参画しながら事業を展開していきたいと考えています。

子どもがサンドイッチマンを

そういうことで、夏にやった「さきらタウン元気いっぱい夏まつり」の取り組みをちょっと紹介させていただきます。本事業のキックオフ的な位置づけで開催しました。「最近は本当に人通りが無くなってきたな」と商店の人たちが言いだしてきた商業施設の真ん中で展開しました。子どもたちが「僕たちでやることないの」と言って、「じゃあ宣伝してきてよ」って、サンドイッチマンをしている写真です。「今水鉄砲ゲームをしています」って。その奥では、プラスチックダンボールで船を作っています。これは、最初から決めていなかったのですが、船を作りたいとみんなが言いだしたので、船やったら動いた方がいいよねってことになり、下に車輪を付けました。この取組は千葉の「コミュニティアートふなばし」さんからご紹介いただいた、仙台の門脇篤さんというアーティストにナビゲーターをお願いしています。

これが出来あがった「さきらシップ」です。乗組員のオーディションで乗船する子ども達、クイーンと船長が決まりました。出航式ではシャンパンわりみたいなことをやって、まちを練り歩くんですね。おかしなもので、なにかをつくって、それをみんなで一緒に動かし、練り歩くとお祭りの御神輿のような状況が生まれ、何か、お祭りが生まれたって感じです。その他、ジュニア・オーケストラがまちなかで演奏するなどいろんな展開を行いました。これは地域の NPO がやっているコミュニティカフェなんですけど、そこで読み聞かせをやったり、その前に演奏をしたり。あるいは座・高円寺さんと提携した演劇ワークショップを行いました。その他、藤浩志さんのかえっこバザールをやったり、ゴールドジムというジムにご協力いただいて、バランスボールを使ったコミュニケーションワークショップを行いました。

舞踏とお化け屋敷の融合

これはお化け屋敷ですが、企画や運営は全部さきらボランティアコミュニティが担っています。毎年 1300 人位が来て、「中学 3 年の最後なのに入れなかった」、「4 年間見続けた」みたいに、子どもたちが毎年楽しみにしています。劇場版お化け屋敷ということで、舞踏家「今豹子」さんと「倚羅座」さんがお化け屋敷をセットにして舞踏を行います。舞踏などみたことのない 1300 人の子供たちに、お化け屋敷を通じて舞踏を見せるという、すごいアウトリーチ企画だなと僕は思っています。

駅前ではまちかどコンサートをやりました。この広場では盆踊りがあったり。今年の特徴は今までさきらのエリアだけでやっていたんですが、商工会の方たちなどにつながって、ホールがあるさくらエリアだけでなく全域でやりましょうと、こういう展開になったわけです。僕がまちを歩いていると、みんなが「お祭り良かったよね、良かったよね」って言うんですね。今まで長い間さくらでやっていたのですが、そんなこと言われたことなかった。子どもたちが宣伝して回ったのが良かったのかどうか、わからないですけど、つながることを意識した、やっぱり違った取り組みになってきてるなと思います。

つながりを求める地域の人々

これは「地域のつながりが必要か」というアンケートに対する答えですが、子どもが 75 パーセント、20 代になると 92 パーセント、30 代 94 パーセント、50 代 100 パーセントです。駅前の新住民にしたんですね。何のためですかと聞いたら、「いざという時のため」とか、「防犯」とかいったことが主なんですが、意外につながりが必要だと思っているのだと思いました。他に「地域の魅力は何ですか」という問いには、「買い物など日常生活が便利」というのが一番になっていて、「歴史や文化を感じていますか」はあんまりで、「公共施設が整備されているか」は、さくらがあるんですけど、それも低かったり、ちょっとまだ頑張りが足りないなということです。事業が終わった後に同じアンケートをして、どういう結果が出るかを集計したいと考えています。

最後になりますが、10 月 3 日に、市内六地藏地域のお寺や、さっき少しお話した和中散という歴史ある場所で、地域のアーティストやジュニア・オーケストラが演奏したり、地域の資源と芸術文化が交響する企画を行います。ただコンサートをやるだけでは面白くないので、自治会の人にそのまちの話をいろいろ聞くワークショップをして六地藏地区に因んだ 6 つの話をつくり、そのお話の合間を音楽がつないでいき構成する、手作りコンサートを考えています。これも 3 回目くらいの取り組みになっています。地域の人に地域の歴史、生活文化、自分たちの想いみたいなのを語ってもらおうのですが、自分たちのまちを再認識することになってすごく良かった、と言ってもらっています。

小さいまちなので創造都市とまでは言えないと思いますが、1 人でも多くの創造的な市民が生まれることや子ども時代から長期ビジョンをもってともに生成していくことが我々公共ホールの使命でもあると思い、なんとか良い結果が出せるように頑張りたいと思っています。今後ともよろしくお願いします。

(以上)

コメント

コメンテーター：野田邦弘

プロフィール：鳥取大学地域学部教授。2004 年まで横浜市職員。文化芸術都市創造事業本部・創造都市推進課担当課長として横浜トリエンナーレ等を担当。現在、あいちトリエンナーレ運営会議委員などを務める。主著に『創造都市・横浜の戦略』（学芸出版社、2008）など。

横浜と栗東市の発表について、コメントを簡単にしたいと思います。横浜も栗東市も、両方ともベッドタウンで、文化の創造性を生かした地域づくりをやろうということで共通していますが、首都圏の大都市と 5 万人強の都市ということで、規模も取り組みの方向もちょっと違うと思います。

まず、横浜市ですが、この界限に古い歴史的な建物が残っていますが、20 年前はもっといっぱいありました。今から思うと、だいぶ壊して、新しいビルに建て替えたということです。実際に芸術不動産を始めていますが、なかなか供給が間に合わなくなっている、ニーズの方が多いんですね。もっと残っていれば、もっともっとアーティストが集積したのではないかと思います。

じゃあどうして古い建物なのか、新しい建物でいいのではないか、という話もあると思います。いろんなアーティストが共通して言いますが、何かアイディアが生まれてくる空間はやっぱり歴史があるところだと。ジェイコブズは、「新しい建物の中からは古いアイディアしか出てこない。けども、往々にして、古い建物の中から新しいアイディアが出てくる」と言っています。このことの意味を私は噛みしめておきたいと思います。

それから政策的な観点から行くと、秋元さんの説明にも、横浜の場合は創造産業との連携が弱点だとありました。私が取り組んでいた時から、経済局も一緒になって創造産業の集積をやろうとしたのですがうまくいかず、今でも課題として残っていると思います。21 世紀型の産業構造に展開していくところが、横浜の創造都市にとって大きな課題だと思います。

もう 1 つは、「すべての市民はアーティストだ」ということが出ていますが、これはすごいことだと思いました。実は私、横浜市立大学の授業でクリエイティブシティの話もするのですが、創造都市政策について「素晴らしい話だけど、私は知らなかった」という学生も結構いるんですね。「なんで宣伝しないんですか」という風に聞かれます。宣伝してないわけではないんですけど、やっぱり 360 万を越す人口の中で、なかなか浸透していないことがあります。

それと創造都市の取組が旧市街地のこの近辺から始まったことがあります。つまり、みなとみらいの開発によって関内地区の衰退が始まったんですね。このままでは危ないということで、旧市街地の活性化が課題になりました。ある意味ではそれはすごく上手くいっ

たわけです。ですから、次のステップに行こう、全市的に創造都市にしていこうとなったわけです。しかしそのような経緯を知らない郊外部に住んでいる人たちから都心ばかりやるのは不公平だねっていう声もあります。これは全部局と連携をとりながら取り組むべきだろうと思います。

それから栗東市ですが、さきらの活動ですね。まちが新しく出来て、アイデンティティが形成されていないところで、それをどう作っていくかというのは大変難しいところもあるのですが、わりと市民が参加している中でいろんなことが出来ていると感じました。お話を聞かせてもらおうと、コミュニティを作っていくための活動が生まれているように思います。私も実は当地における障害者美術（アールブリュット）を特集したテレビ番組（日曜美術館）を見ていました。そこには素晴らしい作品があって、それを既存の社会福祉事業団がやっていることにすごく驚いています。そういう既存の活動を新しい角度から捉えて直していくことが大切だと思います。

最後ですが、なぜアーティストかということです。なぜアーティストの集積をはかろうとするのか。アーティストって、とりあえず役に立たない。役に立たないってことの意味を昨日平田さんが熱く語っていましたが、役に立たないって一見思えることの中にあるなんらかの言葉にしづらい価値みたいなものがあって、それに最近私は注目しています。例えば、川俣正という横浜トリエンナーレの第 2 回のディレクターだった人ですが、彼はいろんな取り組みをしています。コールマイン田川という、炭鉱だったところに 10 年間通って、鉄塔を建てるというプロジェクトを行いました。10 年間やって、そのために作業所を作ったり、いろんなことをやったけど、結局鉄塔は建たなかった。けども、10 年間通してやったということに意味があったと評価されています。ものとして何かを作るという近代的な価値じゃなくて、コミュニティの中でもう 1 回コミュニケーションを取り戻して行く、活性化していくということも重要なことであると。

現代社会では、このようなコミュニケーションや人間関係が失われてきている。それをアートの力で取りもどしていく、そのようなプロジェクトだと思います。国主導で開発をやってきたことが破綻して、地域で地域づくりをやっていく時代になりました。そういうときに金がない、人がない、アイディアがないと愚痴ばかり言うのではなく住民 1 人 1 人が考える。それが創造的地域づくりだと思います。創造性のネタというのは地域住民の中にあるわけですから、それをどのように引き出すかが大事な視点だと思います。その際にアーティストが力を発揮するのだろうと思っています。

(以上)

<質疑>

(質問)

横浜市さんは、この 11 月に行われる APEC と創造都市を結び付けて考えてらっしゃるみたいですが、その部分についてちょっとうかがいたと思います。どのような位置付けといますか、関連付けをされていらっしゃるのでしょうか。

(秋元)

非常に難しいところです。APEC は非常に警備の厳しい国主催の国際会議なんですね。横浜市で誘致して、11 月から始まるので今準備をしています。OPEN YOKOHAMA がなぜ 11 月 3 日までかというと、APEC の期間にやれないんですね。創造都市の事業は街の中での展開が多いので、正直言って、警備の厳しい APEC 期間中は創造都市のイベントはお休みです。

(質問)

音楽をキーワードに創造都市を進めていこうとしているのですが、こういうシンポジウム等では同じアートといっても、演劇系が主で、音楽そのものに力を入れてやってるのは非常に少ないと思っています。今日栗東市さんが音楽から演劇、コミュニティアートを包括的にやってらっしゃるんで、その辺の結び付け方や発想の原点などについてお尋ねしたいと思います。

(西川)

予算があったときは鑑賞系の事業であつたりとか、包括的にいろんな事に取り組んでいました。現状はいろんな厳しい状況になっていく中で、人づくり、まちづくりという部分が主軸になっています。芸術監督や総合的なプロデューサーというのは居ないですが、まず同じ規模の劇場の水平的なネットワークを全国に持つ、そこからいろんな情報を共有するということを行っています。また地域の人材同士から生まれる人的ネットワークを大切にしています。さっきお話したジュニアオーケストラの秋山先生も、大阪フィルのティンパニストが滋賀県の音楽振興会の会長、僕が事務局長をボランティア活動として行っていて、そういうつながりから秋山さんにお越しいただいているという状況であつたりします。

そういう意味ではこれから、さきらフェローという位置付けで、いろんなフェローをつくっていったらいいなと思っています。かなり東京の方にご支援いただいています、それはあくまでも無償であつたりとか支援であつたりとかというレベルです。

それと、これは私の考えでもあります、やっぱり、根幹に教育があると思います。教育が人を作って、人が文化を作るという 1 つのプロセスというか。だから教育という部分

をさきらでしっかり位置づけられたらなと考えています。

(質問)

1点ずつ質問させていただきます。まず横浜市ではランデヴープロジェクトについてですが、このプロジェクトによって障害者自身が生計を立てられるのかどうか、施設の生産性がどのようになっているのかをお教えいただければと思います。

栗東市についてですが、人口が増加している中で財政緊縮を迎えると、新たな事業を、特に芸術文化分野で為し上げていくのは難しいのが一般的かと思います。まちを元気にしていく芸術文化の力が素直に認められて進めていращやるのか、あるいはご苦労されて新規の事業をたちあげていращやるのか、その辺を教えてくださいと思います。

(秋元)

地域作業所は、いろんな作業をしています、基本的に製品販売だけで収支が取れていません。公的補助金が入って成り立っており、どちらかというと障害者の社会復帰的な面が大きいです。以前よりは若干収入が多くなっているんじゃないかと思いますが、アーティストの方にもボランティア的にやってもらっており、一点物の製品だからといえ高い値段もつけられませんが、それで自立できるような収入は取れてないです。

障害者の方にとっては、自分たちの作った製品が売れて、前向きな気持ちが出てきたという状況です。また難しい問題もあります。障害者の方がやる気になりすぎて、あまりに没頭されちゃうことがあって、それをコントロールして少し休ませないといけない時もあります。逆に注文がどんどん来ているんですが、全く製品製作が追いつかない時もあります。そのように、障害者とのランデヴープロジェクトはまだ実験的な状況です。

(西川)

僕は役所の人間ではないので、本当にどこまで苦しいのかという実態は分かりませんが、役所の方に「どこも地方財政厳しいのですから、頑張りましょうよ」って言うと、「うちはその中でも一番厳しい」とおっしゃるぐらいです。かなり厳しい状況で、「新規事業は全部ストップ」といわれているぐらいです。

そうした事情ですから、実はこのモデル事業を申請する時も、申請すること自体にハードルがあったことは事実です。ちょうど同じ時期に、文化庁さんの「優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業」の募集があつて、そちらは、指定管理者の更新年ということもあり申請することができませんでした。それで、この「創造都市モデル事業」を一生懸命申請したっていうのがぶっちゃけた状況です。今日一緒に来ている栗東市の都市計画課では、まちづくり事業を積極的に展開されていて、主に都市計画課のみなさんに後押しいただいてやっています。苦勞しながらというのが現状でございます。

(以上)